

国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和58年度)4

高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要

—新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江南遺跡—



1984

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

はしがき

昭和57年度より、新旭町の平野部を縦断する国道161号線バイパス建設に伴う発掘調査を本格的に開始いたしましたが、今年度は、南より順に新庄城遺跡、正伝寺南遺跡、針江南遺跡の3遺跡を対象に調査を実施いたしました。その結果、考古学や歴史学の研究に重要な資料となる、弥生時代から戦国時代にわたるさまざまな遺構や遺物が出土いたしました。

発掘調査の正報告書は、後日刊行の予定であります、とりあえず本年度の発掘調査の経緯と調査成果をとりまとめ、その概要を報告したいと思います。本書が、湖西地方の歴史を考えるうえで、広く活用されれば幸いです。

なお最後に、調査に御協力をいただいた関係者、地元新旭町、同町教育委員会の各位に感謝いたします。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

外池忠雄

例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う、高島郡新旭町所在新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江南遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、「一般国道161号（高島バイパス）新旭町内遺跡発掘調査」として建設省からの委託（82,469,000円）を受けて滋賀県が実施した。
3. 調査期間は、新庄城遺跡が昭和58年5月20日より8月27日まで、正伝寺南遺跡が5月21日より12月29日まで、針江南遺跡が7月20日より12月10日まで発掘調査を実施し、それ以降、昭和59年3月まで整理作業を実施した。
4. 調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会技師吉谷芳幸、清水尚、同嘱託尾崎好則を主任調査員に得て実施した。
5. 調査にあたっては、新旭町役場、新旭町教育委員会ならびに同委員会主事岡司高志氏から格別の配慮を賜った。記してお礼申しあげたい。
6. 調査・整理にあたっては、以下の諸氏の参加と協力を得た。

神谷友和（滋賀県文化財保護協会技師）、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター嘱託）、堀内宏司、服部喜和子（調査員）、氏丸隆弘、西尾幹弘、小原慎一、加藤由美、斎藤博史、福井真理子、南淳一、小野成巳、井上誠、越智文彦、中瀬正一、松場由希子、川原美智子、山本桂子、奥野美香（追手門学院大学）、森下直子、森本教子、杉間恵子、井上寛子（仏教大学）、下田順一、前角和夫、宮川安志、安藤修（奈良大学）、北川節男（西九州大学）、林 要（金沢大学）、広浦美紀（ブルーレイ学院大学）、宮川きよ子、深田ます子、寿福滋（主任調査員・写真）。
7. 本書は第1章を吉谷芳幸、清水尚、第2章を清水、氏丸隆弘、第3章を古谷、山口順子、第4章を尾崎好則、前角和夫が執筆し、全員で討議のち兼康が総括、編集した。
8. 図面作成、整図は調査者全員があたり、写真撮影は、現場では各主任調査員、遺物撮影は寿福滋が行った。

目 次

はしがき

例 言

第1章 新庄城遺跡の調査	1
--------------	---

1. 調査経過
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第2章 正伝寺南遺跡（南地区）の調査	6
--------------------	---

1. 調査経過
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第3章 正伝寺南遺跡（北地区）の調査	18
--------------------	----

1. 調査経過
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

第4章 針江南遺跡の調査	24
--------------	----

1. 遺跡の概要
2. 層 位
3. 遺 構
4. 遺 物
5. 小 結

図版目次

- 図版1 新庄城遺跡・遺構
(上) 土壘状遺構基底部(西より)
(下) SD1およびSD2(東より)
- 図版2 新庄城遺跡・遺構
(上) 土壘残存部
(下) 左・SE3 右・SE4
- 図版3 新庄城遺跡・遺物
- 図版4 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構
(上) 第4区～第5区全景(南西より)
(下) 第4区 SE1周辺(北東より)
- 図版5 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構
(上) 第5区北東端部 SD35周辺(南西より)
(下) 第5区北平面全景(南より)
- 図版6 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構
(上) 第5区 SB1周辺(南より)
(下) 第6区 SB2(北より)
- 図版7 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構
(上) 第7区 SB3(東より)
(下) 第8区 全景(東より)
- 図版8 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物
- 図版9 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物
- 図版10 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物
- 図版11 正伝寺南遺跡(北地区)・遺構
(上) 全景(北東より)
(下) 塙状遺構2(北より)
- 図版12 正伝寺南遺跡(北地区)・遺構

(上) 土器群1(西より)

(下) 土器群7(南より)

- 図版13 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物
図版14 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物
図版15 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物
図版16 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物
図版17 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物
図版18 針江南遺跡・遺構

(上) B地区全景(北より)

(下) C地区全景(南より)

- 図版19 針江南遺跡・遺構
(上) C地区全景(北より)
(下) SB1・SB2(南より)

- 図版20 針江南遺跡・遺物
図版21 針江南遺跡・遺物
図版22 針江南遺跡・遺物
図版23 周辺遺跡分布図
図版24 新庄城遺跡・遺構平面図
図版25 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構平面図(1)
図版26 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構平面図(2)
図版27 正伝寺南遺跡(南地区)・遺構平面図(3)
図版28 正伝寺南遺跡(北地区)・遺構平面図
図版29 針江南遺跡・遺構平面図
図版30 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物実測図(1)
図版31 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物実測図(2)
図版32 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物実測図(1)
図版33 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物実測図(2)
図版34 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物実測図(3)

図版35 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物実測図（4）

図版36 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物実測図（5）

図版37 鈴江南遺跡・遺物実測図（1）

図版38 鈴江南遺跡・遺物実測図（2）

挿 図 目 次

第1図 新庄城遺跡トレンチ配置図	1
第2図 正伝寺南遺跡トレンチ配置図	6
第3図 土鍤・土馬・ミニチュア土器・双孔円盤 実測図	15
第4図 墓状遺構1（東より）	19
第5図 鈴江南遺跡トレンチ配置図	24
第6図 水神平式土器実測図	29

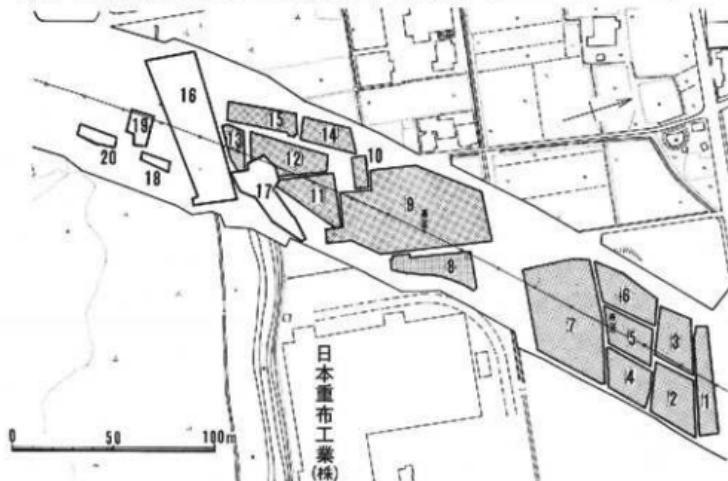
第1章 新庄城遺跡の調査

1. 調査経過

① 本年度は、昨年度の調査を継続し、新庄城遺跡の南限を明らかにするため、安曇川の堤防までを調査の対象とした。本年度調査区の北端には、高さ約3m、幅約5mの土手と、その南側に幅約3mの東流する水路があった。

調査は、当初土手および水路が新庄城の遺構と何らかの関わりを持つ可能性が考えられたため、遺跡周辺の踏査および土手のたち割り調査を最初に行った。その結果、水路については、下流で安曇川と合流している新しい水路であることが認められた。そのため、この溝は直接新庄城とは関わりがないと判断され調査の対象から除外した。土手については、城跡と推定される地域の南辺付近にあたり、城の土壁の可能性が考えられたが、たち割り調査の結果、土手の覆土に明治時代以降と考えられる陶磁器片などが含まれていることが判明した。そのため新庄城とは直接関係がないと考え、土手全体を撤去した。さらにトレンチを掘下げた結果、土手より下層から江戸時代末～明治時代中頃の陶磁器片を含む氾濫の跡が検出された。

また、昨年度調査できなかった部分が土手の北東側にあったため、ここに第17トレ



第1図 新庄城遺跡トレンチ配置図

ンチを（トレントナンバーは、昭和57年度に続けた。）設け調査したが、遺構は検出されなかった。さらに本年度調査の主眼である新庄城の南限を明確にするため可能なかぎり南側にトレントを延ばしたが（第18、19、20トレント）、安曇川の数時期の氾濫の跡を検出しただけで遺構は検出されなかった。これらの結果をふまえ、調査の主力を土手を撤去した跡地に設けた第16トレントに集中した。このトレントは調査の進行上東西の2ブロックに分けて調査した。

昨年度の調査の結果から、本年度調査区においても大量の湧水が予想されたが、本年度は6月の異常高水によりほとんど湧水はなかった。しかし、6月末から7月にかけての安曇川の異常増水に伴い地下水が回復し、前年度同様の湧水となった。

2. 層位

層位は基本的には昨年度の調査で明らかになったものと変りはないが、第16トレント東側は明治時代の氾濫で搅乱をうけていたため、遺構は検出されなかった。さらに第16トレント内の西北部は遺構面直上まで土取りによる搅乱を受けていた。

3. 遺構

今回、遺構が検出されたのは第16トレントからのみであり、主な遺構は、土壘状遺構、溝状遺構、井戸である。

（1）土壘状遺構 第16トレント東区より昨年度検出された石敷遺構に直行する形で同様な石敷が東西に約37mにわたり検出された。当初昨年と同じ性格の遺構かと考えていたが、トレント壁面の観察の結果、断面形がカマボコ状を呈する底部の幅約280cm、高さ約60cm以上を測る土壘の基底部であることが判明した。この観察に基づき、トレント西区の調査を進めたが土壘を西に6.5m露出させた地点から大きく搅乱を受け全容は明らかにし得なかった。

土壘の構造はまず、生活面より溝状に深さ5～10cm掘込み、その底部にこぶし大の石を敷いた後、その上に土を盛上げて築いているが、版築などの工法は用いられていない。土壘の基底部からは白磁など16世紀代の遺物が出土している。

（2）溝状遺構 土壘の北側にはSD1、SD2の2条の溝がそれぞれ土壘に平行するように掘込まれている。

SD1 土壘状遺構の北側を東西に走る2条の素掘の溝のうち南側のもので、長さ59m以上、幅1~3.2m、深さ8~17cmを測る。溝の東側は氾濫により攪乱され不明である。覆土は青灰褐色粘土で、流れはきわめて緩やかか、あるいは空掘のようなものであった可能性が強い。溝底より瀬戸および美濃系の陶器など16世紀代の遺物が少量出土した。

SD2 SD1の北を平行して走る溝で、長さは32m以上、幅0.7~3.2m、深さ15~18cmを測る。この溝の様相はSD1とはほぼ同じである。

(3) **井戸** 本年度も昨年度検出された井戸(SE1、SE2)と同種の石組みの井戸が検出された。本年度検出の井戸は、前年度の井戸番号にひき続きSE3、SE4と名付けた。

SE3 トレンチ中央の北側、SD2の北岸に位置する。茶褐色砂礫層に掘込まれた上方のややすぼった袋状をなすもので、掘方は組石の外方約30cmほどのところにある。井戸内径約85~90cm、深さ約120cm、掘方平面径約180cmを測る。石組は河原石を8段程積上げたもので基底石は9個である。石の積み方は最も広い面を正面に出すことを原則としている。井戸底からは何の施設も検出されなかった。井戸の東北方向に、掘方に続き幅70cmの溝状の落込みがみられ、排水施設かと考えられる。井戸の埋土には人頭大から50cm角ほどの石が大量に詰込まれていた他は、遺物の出土はなかった。

SE4 SE4はトレンチ西北部、SD1の北岸に位置する。茶褐色砂質土に掘られた円筒形井戸で、石組内径約100cm、深さ約80cm、掘方はやや角ばった円形で、平面径約180cmを測る。石組はSE3に用いられているものよりやや小さな河原石を底から9段ほど積上げたもので基底石は10個である。石の積み方はSE3と同じである。石組の最上部は石の隙間に10cm角ほどの小石を詰込んでいる。埋土の状況はSE3と変らないが、14世紀代の鎧蓮弁文を持つ青磁碗が1点出土している。

4. 遺 物

本調査における出土遺物は、昨年度調査に比べて量的にかなり少なく、然もほとんどが小破片であった。出土遺物の時期は、その主体が16世紀代にあり、その前後のものが若干含まれる。

(1) 輸入陶磁器 (1) は鍋蓮弁文をもつ青磁碗で、かなり肉厚に成形される。包含層から出土している。(2) は(1)と同様の青磁碗である。(1)に比べて、釉の発色が青白味を帯びかなり肉薄でていねいな成形である。SE 4 から出土している。(3) は青花白磁の皿で、見込みには池を主体とし、周囲に草花を配した文様が観察される。疊付は露胎をなす。包含層からの出土である。

その他、土墨などから、片彫りの大きな蓮弁文をもつ青磁碗、白磁皿の小片が検出されている。^② 白磁皿は小野編年皿B群が1点、C群4点を数える。

(2) 陶磁器 (4)、(5)、(6) は江戸時代の伊万里焼と考えられる。(4) は肉厚成形の碗で、体部外面に梅花文が描かれる。見込みには重ね焼痕が観察され、疊付は露胎をなす。(5) は小碗の底部で、見込みには花弁文を置く。(6) は比較的大型の皿で、見込みに風景画と考えられる文様が描かれている。高台内中央には円形の凹部があり、その周囲から疊付までは釉の搔取りが施される。(6) は輸入青花の可能性がある。いずれも新庄城廃城後のものである。(7) は瀬戸系の碗で、灰白色の軟質胎土に黄緑色の光沢ある釉を施す。貫入が顕著である。SD 1より出土している。(8) は瀬戸系の壺片と考えられる。胎土、釉調とも(7)と同様相を呈する。土墨からの出土である。(9) は美濃系の壺で、天目釉が内外面ともに施される。茶入れではないかと考えられる。SD 1から出土している。(10) は壺片で、二次的焼成を受けていたため判然としないが、暗褐色の地肌に灰釉が流し掛けられていたものであろう。胎土中には多量の長石粒が観察される。伊賀焼の可能性がある。SD 1から出土している。(11) は信楽焼の擂鉢で、5条一単位の擂目が幅をもって配置されている。包含層からの出土である。

(3) 土師質土器 包含層及び各遺構より極めて小破片の状態で検出されている。形態は昨年出土した土師質土器の皿と同じものである。

5. 小 結

本年度の調査により、第1トレーニングにおいて東西に走る土墨とそれに添う2条の溝が検出されたが、これより南側からは何の遺構も検出されなかった。このことにより、新庄城の南辺はこの土墨をもって画することが可能であると考えられる。しかし、土墨の東端および西端は攪乱を受け明確にすることはできなかった。そのため、西側

において土塁が北に曲がり、昨年度検出した石敷遺構につながるものなのか、あるいはSD1にそのまま添って西に延びるものなのかは明らかにできなかった。SD1、2の2条の溝については、堀、もしくは空堀のようなものであったと考えられる。

<註>

- ① 宮崎幹也・清水尚 「新庄城遺跡の調査」（『国道161号線バイパス関連道路調査概要』3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和58年）
- ② 小野正敏 「山梨県東八代郡新巻木村出土の陶磁器」（『貿易陶磁研究』No.1 日本貿易陶磁研究会 昭和56年）

第2章 正伝寺南遺跡(南地区)の調査

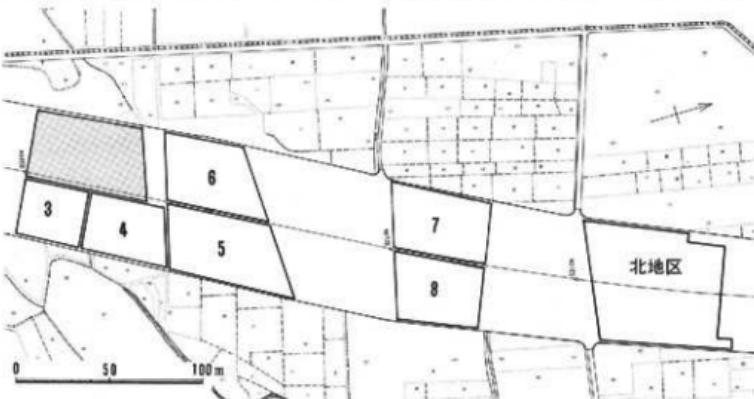
1. 調査経過

① 前年度より継続し、前年度の東側部分（第3・第4区）終了後、北側にその範囲を拡げ（第5・第6区）、約80m進んだ地点で未買収地区に到達した。この未買収地区については、現在交渉中であることや、後の調査時における適宜な面積などを考慮し、南側に約5m～10m、北側に約10mの幅で余裕をもたせた。未買収地区より北側部分は約30m～40m北へ進んだ地点の上層遺構を検出して本年度の調査を終了した（第7・第8区）。

本年度は上層に注目すべき遺構が検出された。第4・第5区においては、平安時代中期と推定される建物群や、第7・第8区においては、12～13世紀代の建物群など、遺構・遺物共に良好な資料を得ている。

2. 層位

第3～6区の南北方向において平均的に観察される層位は、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗褐色混礫土、第3層・暗青灰色粘質土、第4層・暗青灰色混礫土、第5層・暗青灰褐色砂礫土である。しかし、第4区より北側では、基本的な層位の水平堆積は連続せず、氾濫などによる層位の搅乱が拡がる。第2層は厚さ約15cmを測り、



第2図 正伝寺南遺跡トレンチ配置図

少量の奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土する。第4～6区の遺構群は、表土下約30cmの第3層上面において検出される。第5・6区北端の東西方向では、第1層・耕土、若しくは泥土、第2層・暗灰褐色礫土、第3層・青灰色粘質土、第4層・暗青灰色砂質土、第5層・暗青灰褐色砂礫土が平均的な層位である。また、第5区北東端部では、黄褐色混礫土を主体とし、水分の含有量が極端に少なく、当遺跡においては他の地点では観察されない。第7～8区では、さらに時代が下ると考えられる氾濫原と氾濫による礫の浸食を受けなかった粘土面との境界線が明確に把えられる。南北方向断面においてこの変化を把えると、礫原では、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗褐色土、第3層・黄灰色砂質土、第4層淡灰色砂質粘土、第5層・灰色砂層、第6層・暗灰色粘土層、第7層・礫層であるのに対し、粘質土層面では、第1層・耕土若しくは泥土、第2層・暗褐色混礫粘質土、第3層・暗褐色混礫砂質粘土、第4層・灰褐色砂礫層、第5層・礫層となる。第8区の遺構群は、暗灰褐色粘質土を基本埋土として立地している。

3. 遺構

検出した遺構は、井戸、柵、建物、土坑、溝、ピット群などである。以下、その概略を記す。

(第3区～第6区の遺構)

(1) 井戸 SE1 第4区北端に位置する井戸。井戸の掘方は、東西1.1m、南北1.3mのほぼ円形である。井戸枠は、径約55cm、幅約45cmの曲物を底部に配置し、その周囲に厚さ約5cm、幅約25cmの板を8枚、縦方向に打ち込んでいる。井戸底から、井戸検出面までは約80cmを測る。掘方から糸切り底をもつ須恵器や土師器の壊が多量に出土した。埋土は暗青灰色粘質土の単一層で、板材などの他、遺物は極少量であった。

(2) 柵 SA1 SE1の西側に隣接する東西方向の掘立柱列。9ピットを検出し、柱掘形は径約35cm～50cmの楕円形を呈する。この柱列は東側端部のピットより南方向へほぼ直角に展開する可能性が強い。さらに南面には多く須恵器、土師器の壊片が出土しており、この柱列に区画された建物の存在が推定される。おそらく礫石建物であったものが遺構面が浅いため耕作などの原因によって礫石が除去されたものと思

われる。

(3) 建物 SB1 第5区南端に位置する桁行2間、梁行1間の掘立柱建物。N-18°-Eの東西棟。柱掘形は径約50cm、深さ約15cm~35cmの円形である。柱穴埋土には焼土が混入する。

SB2 第6区東南端に位置する南北3間、東西2間の総柱建物で、N-16°-Eの南北棟。南に1間分、東は排水溝断面に2間分の間隔でピットが検出されており、3間×2間以上の建物となる可能性もある。柱掘方は径約30cm、深さ約16cm~25cmの円形である。

(4) 土坑 SK12 S D12の南側に位置する。全形状は把握できないが、検出状況では径約3mの半円形を呈する。両端最深部で約20cmの深さを測る。検出遺物には、黒色土器、須恵器の椀・壺身、土師器の甕などがある。

SK13 SB1の南側に位置し、径約50cmの円形を呈する。深さ約35cmを測る。出土遺物は、糸切り底の土師器の壺が大半を占める。

SK14 SB1の東側に位置し、径約95cmの円形を呈する。深さ約15cm。近江型黒色土器の椀が出土している。

SK15 S D25の西側に位置し、東西約5m、南北約2mの隅丸方形を呈する。深さ約5cmを測る。遺物は土師器の小片が検出される。

SK16 第6区西南端に位置し、径約40cmの円形を呈する。深さ約25cm。土師器の片口鉢が出土している。

SK17 第6区北東端に位置し、径約4mの梢円形を呈する。深さは中央部で約5cmを測る。

SK18 S D43の西側に位置し、東西約2m、南北約70cmの梢円形を呈する。深さは約5cmを測る。遺物には土師器の高壺などがある。

SK19 第6区北西端に位置し、南北約3m、東西約2mの隅丸方形を呈する。深さは約5cmを測る。

SK20 第6区西南端に位置し、東西約2m、南北約1mの隅丸方形を呈する。深さは約20cmを測る。箸の他多くの木材片が出している。

SK21 SK19の南側に位置し、南北約2m、東西約80cmの隅丸方形を呈する。深さは約15cmを測る。土師器の皿、曲物の底板などが出土している。

SK22 SD37の東側に位置し、東西約2m、南北約60cmの楕円形を呈する。深さは約10cmを測る。須恵器の小片が出土している。

(5) 溝 **SD4・5** 第3区南端に位置し、幅約60cm、深さ80cmを測る。この2条の溝は平行して東流する。

SD6 SD5の北側に位置し、SD7に注ぐ幅約40cm、深さ約10cmの東流する溝である。溝内からは、曲物の底板、下駄などの木製品が出土した。

SD7 SD6の排水をうけて東流する東西溝。幅約1.5m～4.5m、深さ約20cmを測る。綠釉陶器の椀をはじめ出土遺物は多い。

SD8 第4区東南端に位置し、幅約1m、深さ約5cmの南流する南北溝。須恵器や土師器の小片を出土したが、その量は極めて少ない。

SD9 SE1の南側に隣接して西流し、SD10に注ぐ。幅約45cm、深さ約10cm。出土遺物は多量で、墨青土器をはじめ、上鍤、糸切り底の須恵器、土師器の壊などが出土した。

SD10 SD9・11の排水をうけて南流する南北溝。幅約2m、深さ約15cmを測る。東壁にはSA1に続くと推定される径約35cm、深さ約6cmのピットが検出された。多量の遺物を出土した遺構で、墨青土器、灰釉陶器、綠釉陶器、糸切り底の須恵器、土師器の壊などが出土している。

SD11 東流してSD9に注ぐ。幅約70cm、深さ約10cmを測る。綠釉陶器、糸切り底の須恵器の壊などを出土した。

SD12 第4区西南端に位置し、幅約40cm、深さ約5cmの南流する南北溝。SD11との重複関係よりみてSD11より新しい。

SD13・14 第4区北端に位置し、平行して東流する。SD13は幅約75cm、深さは東端で約10cm、西端で約5cmを測る。SD14は幅約1m、深さ約10cmを測る。SD8との重複関係よりみて、SD8より古い溝である。

SD15 SB1の周囲に位置する。幅約40cm、深さ約10cm。遺物は少量の土師器片が出土した。

SD16 第5区南東端から第6区東端に西流する東西溝。幅約1.5m～0.8m、深さ約5cmを測る。綠釉陶器、土鍤、箸、板材など多量の遺物が出土した。

SD17～23 第5区南側に位置する小溝群である。幅約35cm～50cm、深さ10cm～15cmを

測る。各溝は約1.5m～2.5m間隔で平行しており、ほぼ磁北の方向で南流する。縁釉陶器、土鍾、須恵器の壊などを検出したが、その量は少ない。排水施設と考えられる。

SD24 第5区北端から南北溝。幅約1.5m、深さ約40cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層は暗茶褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘土層である。遺物は、上層から近江型黒色土器の碗、下層から土師器の壺・甕片が出土している。

SD25 S D24の西側を南流する溝で、幅約25cm、深さ10cmを測る。

SD26 S D23・22・21を横切って S D20に注ぐ南北溝。幅約35cm、深さ約5cmを測る。

SD27 S D23・22・21を横切って S D20に注ぐ東西溝。幅約30cm、深さ約10cmを測る。

SD28 第5区西端から東流し、東端で分流し、東側はSK15に注ぐ。中央部で幅約80cm、深さ約10cmを測る。

SD29～32 第5区西端から東流する小溝群である。幅約30cm～50cm、深さ約5cm～10cmを測る。S D31はS D28との重複関係よりS D28より古い溝である。

SD33 第5区北東端を南流する溝。幅約1.1m、深さ約40cmを測る。遺物は、土馬、須恵器の壊、短頸壺などが出土している。層位でも述べたように、S D33～SD35が位置する遺溝面は、本調査の中で特異な土質を示す。他遺溝面が多量の水分を含有する粘土面、若しくは礫原であるのに対し、水分含有が微量の混礫土面を呈する。この土質面は未買収地区に拡がっている可能性が強く、今後留意しなければならない。

SD34 S D33の東側を緩やかに蛇行しつつ南流する。幅約2.5m、深さ30cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層から土師器の高壺、壺、須恵器片などが出土し、下層からはミニチュア土器、双孔円盤などが検出された。S D33及びS D34はS D35の上層に形成される溝である。

SD35 S D33・34を包括し、緩やかに蛇行しつつ南流する大溝。幅約5m、深さ約50cmを測る。出土遺物は、高壺、鉢、壺の他、小型器台、小型壺など庄内式から布留式の古式土師器が一括して検出されている。

SD36 S B2の南側に位置し西流する東西溝。幅約60cm、深さ約10cmを測る。

SD37～41 第6区中央部南端を南流する小溝群。幅約35～60cm、深さ約10cmを測る。S D39～41は約50cm間隔で平行する。出土遺物は少なく、須恵器の壊片が大半を

占める。

SD42 第6区南西端に位置し、南流する南北溝。幅約45cm、深さ約15cmを測る。

SD43・44 第6区北東部を北流する南北溝。SD43はSD31に、SD44はSD30に注ぐ。幅約35cm、深さ約5cmを測る。

(第7区～第8区の遺構)

(1) 柵 **SA2** 第7区南西端に位置する東西方向掘立柱列。7ピット検出。柱掘形は径約30cmの梢円形で、東側より6ピットに柱根が残存する。東方向については礎面に立地しており、柱痕の一部が氾濫のため消失した可能性がある。

(2) 建物 **SB3** 第7区西侧中央に位置する。掘立柱建物と考えられるが判然としない。SK27の覆屋となる可能性も考えうる。SK27周囲の4ピットを含め、次年度調査のうえ、今後検討を加えたい。

SB4 第8区南東端に位置する桁行4間、梁行3間の掘立柱建物で、N-13°-Eの東西棟。柱掘形は径約30cm～40cm、深さ約20cm前後の円形である。

SB5 SB4の東端南北柱列を一部共有する南北4間×東西2間の総柱建物で、N-125°-Eの南北棟。柱掘形は径30cm、深さ約20cmの円形である。出土遺物が少なく、SB4との時期差は把握し兼ねるが、短期に一部建てかえが行われたものと考えられる。

SB6 SB4の西側に位置する桁行2間、梁行1間の掘立柱建物で、N-10°-Eの南北棟。柱掘形は径約30cm～40cm、深さ約16～20cmの梢円形を呈する。

SB7 SB6の西側に位置する東西4間、南北3間の総柱建物で、N-14°-Eの東西棟。柱掘形は径約40cm～50cm、深さ約20cm～30cmの梢円形である。

SB8 SB7の西側に位置する桁行2間、梁行1間の掘立柱建物で、N-16°-Eの南北棟。柱掘形は径約30cm、深さ約15cm～20cmの円形である。

SB9 SB8の南側に位置する1×1間の掘立柱の建物。柱掘形は径約35cm～50cm、深さ約18cm～20cmの円形である。

(3) 土坑 **SK23** 第7区東南端に位置し、径約80cmの円形を呈する。深さは約25cmを測る。上坑の壁面には縱方向に打込まれた土止めの板が一部残存している。

SK24 SB3の中に位置し、東西約4.3m南北約1.8mの隅丸方形を呈する。深さは約6cm。固く締まった灰褐色土を埋土とする。

SK25 第8区南東端に位置し、全形状は把握できないが、楕円形になると考えられる。最深部で約55cmを測る。遺物は土師器の小皿の他、多数の木材片が出土した。

SK26 SK23の西側に位置する。全形状は判然としない。長方形状の中央部北側より西側へと展開し、西側から東側に向って緩やかな傾斜をもつ。荷札と推察される木製品や鉄刀、土師器の皿など多様な遺物が出土し、その量も多い。

SK27 SB7の北側に位置し、東西約2.1m南北約1.5mの長方形を呈する。深さ約35cmを測る。四隅に径約20cm、深さ約35cmのピットが存在している。南壁及び東壁の一部には、横方向に組まれた板材が残存しており、四方とも板材によって土止めする施設であったことが窺われる。出土遺物は多様かつ多量で、近江型黒色土器の椀、白磁碗、須恵器の片口鉢、常滑焼の甕片の他、土師器の小皿が多数出土している。また、箸や杓・曲物の底板、下駄などの木製品も多い。

SK28 SK25の南側に位置し、東西約60cm南北約40cmの楕円形を呈する。深さ約20cmを測る。遺物は箸などの木製品が検出されている。

4. 遺 物

出土した遺物は、多量の土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器の他、木製品、鉄製品などである。以下、主な遺構より出土した遺物に関して、その概略を記す。

1. 土器

(第3区～第6区の出土遺物)

(1) 井戸 **SE1** (15) は、平底で糸切り底の土師器の皿である。掘方より同タイプの土師器が多量に出土している。

(2) 横 **SA1** (ピット1) SE1と同時期の遺物がピット内より多量に検出された。(21) は、高い高台をもつ土師器の鉢で、口縁端部を欠失する。高台は外方へ傾斜する。

(3) 土坑 **SK12** 遺物は遺構の南端よりまとった状態で出土した。(11) は、口縁部が強く外反する土師器の甕である。内面は、比較的ていねいなハケ調整をしているが、外面体部は荒いハケ調整で、口縁部内面は横ナデを施す。(12) は、貼付高台をもつ須恵器の大形の壺である。(13) は、近江型黒色土器の椀である。口縁端部内面の沈線は明瞭である。口縁部外面は横方向のヘラミガキ、内面には花弁状の暗文が

比較的ていねいに施されている。(14)は、須恵器の坏身である。高台は貼り付けている。

SK13 (22)・(23)は、糸切り底の土師器の坏である。(22)・(23)に代表される同タイプの坏が多く出土している。

SK14 (19)は、近江型黒色土器の碗で、高台は外方へ傾き、やや粗雑に貼り付ける。口縁端部内面の沈線は不明瞭で、内面の暗文は、(13)より粗雑であり、外面体部の指押さえは、不規則である。

SK16 (34)は、口縁部がくの字に外反する弥生時代後期の片口の鉢である。体部内外面をハケ調整し、口縁部内外面はハケ調整後、ナデて仕上げる。

SK18 (27)は、土師器の高坏の脚柱部である。裾部端部は肥厚し、脚柱部は中央部で若干の膨らみをもつ。裾部内外面にハケ口調整を施す。

(4) 溝 **SD7** (16)は、底部外面に糸切り痕が残る須恵質の縁釉椀である。高台内側に稜を有する近江産といわれるもので、全面に光沢のある釉を施す。

* **SD9** 磨晈土器、糸切り底の坏など平安時代中期の遺物が多量に出土している。(7)は、須恵器坏身の口縁部で、外面に墨書が確認されるが、判読できない。(8)は、口縁部がくの字状に外反する土師器の壺で、胴部外面に左上がりの太い格子叩き目がみられる。

SD10 SD9と同様な平安時代中期の遺物が多量に出土している。(1)は、土師器の坏で、底部外面に糸切り痕が残る。(2)は、糸切り底の須恵器碗である。(3)は、糸切り底の須恵器碗で、底部外面には「上」かと思われる墨書が観察される。(4)・(5)は、東濃系の灰釉陶器の碗である。(4)の高台内には「一」の墨書がある。(6)は、無釉陶器の碗である。高台は貼付けで、底部外面の糸切り痕は、一部ナデ消しされている。見込みには重ね焼痕が観察される。

SD14 (17)は、糸切り底の土師器の坏である。

SD16 (18)は、やや高い高台を有する須恵質の縁釉陶器の皿である。底部外面に糸切り痕が残り、高台内側に稜をもつ。

SD22 遺物の量は多くないが、墨書など特色あるものが出土している。(9)は、口縁部がやや内彎する近江型の長甌である。調整は、体部内外面がハケ、口縁部内外面はハケ調整後ナデ仕上げする。(10)は、糸切り底の土師器の坏で、底部外面には

「南」かと思われる墨書きが観察される。

SD33 須恵器の壺、短頸壺片をはじめ、土馬など多様な遺物が出土している。(27)は、高台をもつ須恵器の壺身で、高台内は不調整のため凸凹が顕著である。

SD35 他遺構とは相違し、古式土師器の一括資料を得た遺構である。(28)は、二重口縁を有する壺で、肩折部の外側は凸帯状にわずかに突出して稜をなす。頸部外面に細かいハケ調整を施す。(29)は、平底で体部がわずかに内彎し、底部に円孔を穿つ鉢である。調整は、体部内面がハケ、口縁部内面はハケ調修後横ナデする。(30)は、口縁部がくの字状に外反する壺で、口縁端部は平面をなす。外面にハケ目調整を施す。(31)は、三方に円孔を穿つ小形器台である。外面及び受部内面はヘラミガキし、脚部内面はハケ目調整を施す。(32)は、小形壺である。ほぼ球形の体部をもち、口縁部は直線的に外方に開く。調整は体部外面がハケ、体部内面、口縁部は横ナデする。(33)は、口縁部外面に櫛描平行線文が廻るパレススタイルの壺である。頸部にヘラによる刻み目をもつ貼付穴帯を有する。体部外面には櫛描きによる直線文と波状文が廻り、その下位にはヘラによる刺突文をもつ。調整は、体部内面はハケ、口縁部内面はヘラミガキをする。

SD41 遺構から少量の土器片が出土する。(24)は、須恵器の壺蓋である。成形はかなり粗雑で、天井部外面は不調整で凸凹が激しい。

(第7区～第8区の出土遺物)

(1) 建物 **SB7** (ピット2) (20)は、青白磁の合子蓋である。総輪の後、受部を搔き取り露胎にする。受部の位置より壺形の合子身とセットになるものと考えられる。

(2) 土坑 **SK25** 土師器の小皿、木材片などが多く出土している。(25)は、土師器の小皿で、内面と口縁端部外面に横ナデを施す。

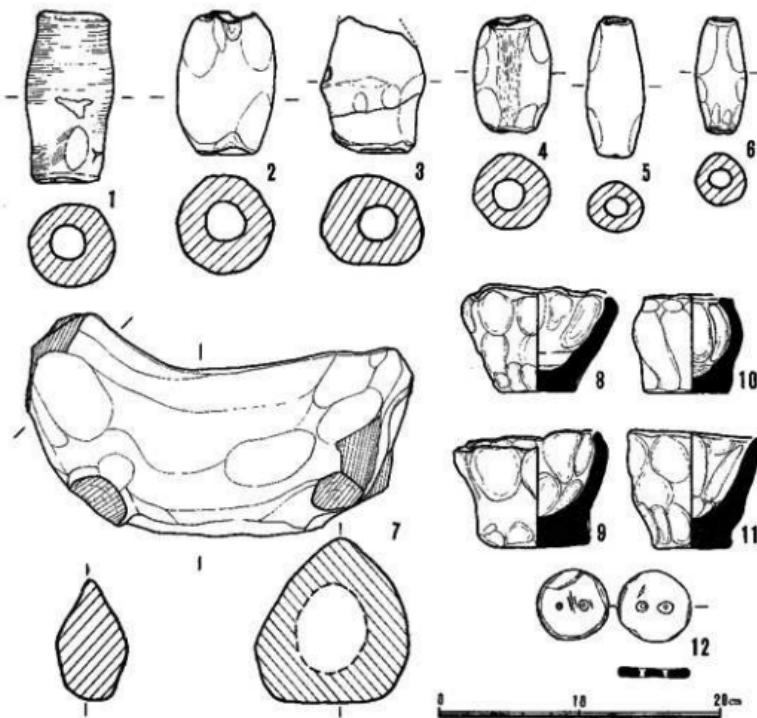
SK26 荷札と推察される木製品、鉄刀、土師器の皿など多様な遺物が出土している。(40)は、土師器の大皿で、内面と口縁端部外面に横ナデを施す。

SK27 近江型黒色土器の碗、白磁碗、須恵器の片口鉢、常滑焼の壺片、土師器の小皿、木製品など多様かつ多量の遺物が出土している。(35)は、高くシャープな高台を有する白磁碗で、大宰府V-2a類^②と同タイプのものである。体部下半は露胎である。(36)は、近江型黒色土器の碗である。口縁端部内面の沈線はやや不明瞭で、

口縁部外面のヘラミガキは観察されない。内面の暗文は粗雑である。(37)～(38)は、土師器の小皿で、内面と口縁端部外面に横ナデを施す。(39)は、東播系の須恵器の片口鉢である。片口部は欠損する。

2. 木製品・土製品・その他

SK26 (41)は、長方形の板材の両端左右に切り込みがあり、荷札と考えられる。奈文研文類の031型式と同タイプである。(42)は、長方形の板材である。荷札などの機能があったものと考えられるが、用途は不明である。(43)は、(41)と同タイプの荷札と考えられる板材である。(41)～(43)については赤外線による精査を行ったが、文字は検出されなかった。



第3図 土錘・土馬・ミニチュア土器・双孔円盤 実測図

SK26 (45) は、(40) の土師器の大皿と共に伴する鉄刀である。峰と柄尻を欠いているため全長不明で、現存長 215cm を測る。刃部も欠失している。

SD5 (44) は、糸巻きの軸の破片である。

土錘 形態より三大別される。

A類 - 土師質で法量の大きいもの (第3図1~3)

B類 - 土師質で法量の小さいもの (第3図4・5)

C類 - 須恵質で法量の小さいもの (第3図6)

土馬 (第3図・7) 頭、尾、足を欠損する土師質の裸馬である。体部は中空を呈し、全体に摩滅が激しい。形式化される以前の形態を示す。

ミニチュア土器 いずれも手捏ねで、形態より3つに大別される。

A類 - 体部が内弯し、法量が大きいもの (第3図8・9)

B類 - 体部が内弯し、法量が小さいもの (第3図10)

C類 - 体部が外反するもの (第3図11)

A類は、平底で、口縁端部を内側に折り曲げる様に内弯させている。外面は横ナデを施し、内面にはナデ上げ痕が明瞭に残る。

B類は、平底で、体部全体を内弯させる。調整はA類と同様である。

C類は、平底から直線的に外反し、端部を丸くおさめる。調整はA類と同様である。

双孔円盤 (第3図12) 滑石製で、比較的肉薄に成形される。ケズリ痕は、摩滅のため、ほとんど観察されない。

5. 小 結

今年度の調査によって、正伝寺南遺跡における遺構立地の在り方と遺構の年代の大まかな全体像が把握された。大別すれば、(B) 第4区から第5区に立地する遺構群、(C) 第5区北東部に位置する遺構群、(D) 第7区南側から第8区に拡がる掘立柱建物を主体とする遺構群、から成る。さらに昨年度調査の(A) 第1区から第2区に見られた土坑群を加えれば、4つに大別することができる。

(A) は氾濫など自然形成による落ち込み状遺構群であり、遺構内からは古墳時代前期と飛鳥時代の遺物が出土した。その氾濫流路は第4区北半面から第5区南端部の間に延びて東流している。

(B) は S E 1 及び周辺の柱穴群を主体とする。S D 9・10をはじめ S E 1 挖方などより多量の遺物を出土した。遺物群は糸切り底の須恵器・土師器の坏、灰釉陶器、近江型の縁釉陶器などから構成され、10世紀後半代の年代綱を得るものである。(A) の上層遺構と考えられ、氾濫によって形成された礫原上に青灰色粘質土が堆積し、その上面に遺構が形成されている。

(C) の土質変化については既に指摘した。立地する溝からはミニチュア土器、双孔円盤など祭祀に伴うものと考えられる遺物や古式土師器の一括など資料的価値の高い遺物が検出されている。

(D) は現在、7棟の掘立柱建物が考えられている。S A 2 及び S B 3 を除くいずれも礫原上に立地し、土師質土器、陶磁器などの出土遺物より12世紀後半～13世紀に時期比定される。

S A 2 と S B 3 は礫原の限界より北面の粘土面上に立地し、(D) における他遺構より遅る時期が考えられる。

<註>

- ① 滝水尚・堀内宏司 「正伝寺南遺跡の調査」（『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』3 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 昭和58年）
- ② 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 昭和53年）

第3章 正伝寺南遺跡(北地区)の調査

1. 調査経過

正伝寺南遺跡のうち、霜降集落に近い部分を北地区とし、南地区と併行して調査を進めた。試掘調査で、遺構や遺物包含層の確認されているNo.8 トレンチより北側にトレンチを入れ、南へむかって調査を進めることにしたが、遺構の広がりが当初の予想よりも北へ延びたため北へもトレンチを延ばす結果となった。中心線は新たに国道センター159番と、161番を結ぶ線を設定した。

2. 層位

基本的に観察される層位は次の通りである。第1層・耕作土、第2層・暗灰褐色粘質土(上層土器群堆積層)、第3層・暗紫灰褐色粘質土(下層土器群堆積層)、第4層・灰褐色細砂層(地山)となっている。第1層は30cm~40cm、第2層は20cm~25cm、第3層は10cm~20cmを測る。当地区からは南地区でみられたような歴史時代の遺構面は検出されなかった。

3. 遺構

北地区からは、3条の溝と2カ所の堰、11カ所の土器群が検出された。

SD1 トレンチ南辺中央より北流した後北東方向に流れを変える自然流路で、最大幅9.0m、最小幅1.2mで深さは80cm~100cmを測る。この流路中に、南側に堰状遺構が1カ所、東端にも堰状遺構が1カ所認められた。また、SD1の最大幅を測る部分に南西に向って長さ8m、幅4m以上の湾入部がみられる。この部分は人為的に掘られたもので、西側はほぼ垂直に80cmほど掘込まれている。また南側は9枚の板材により護岸が施されている(図版11)。この板材は長さ115cm~160cmのものを用い、いずれも下方%ほどを炭化させてから用いている。腐敗を防ぐためと思われる。また湾入部中央付近には、長さ50cm~110cmの杭材が12本打ち込まれている。湾入部上層には土器群1が存在し、多量の古式土師器が一括して出土した。SD1から出土した遺物は、古式土師器、方形有孔土板、各種の木製品類である。特に北地区から出土した木製品類のすべてがここからの出土である。

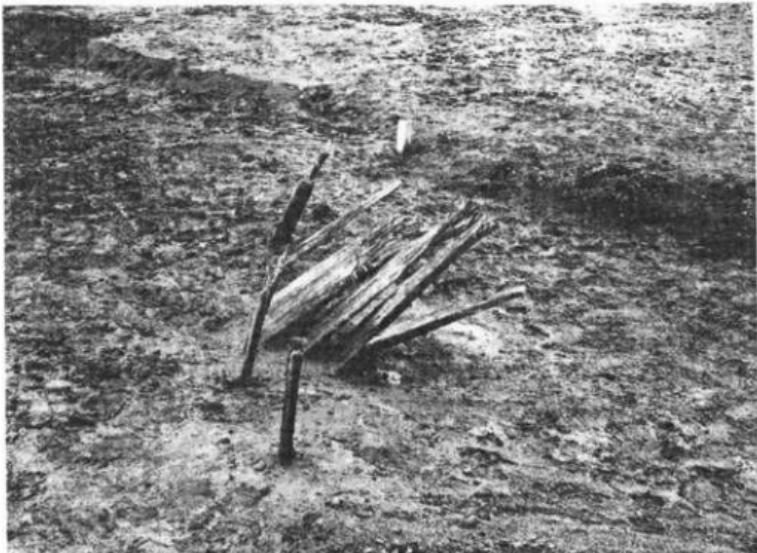
SD2 SD1の堰状遺構1付近から分流する自然流路で、北東へ流れた後屈曲し西流する最大幅4m、最小幅2.7m、深さ35cm～45cmを測る自然流路である。

SD3 SD2に添って流れる幅0.8m～1m、深さ13cm～16cmを測る自然流路であるが、トレンチ南辺より約13.5m流れた地点で消滅する。

この3条の溝は出土遺物の観察から、概ね古墳時代初頭と考えられる。

堰状遺構1 SD1とSD2の分岐点にある杭と矢板により構成された遺構である。その構造は、SD2の東側に添うような形に5本の杭が垂直に近く打込まれ、さらにその北側に5枚の矢板がSD2の流れを受けるような形で斜めにしっかりと打込まれている。打込まれている深さは、溝の底よりさらに40cm～80cmにおよぶ。この遺構の機能は、SD1を横切るような形で打込まれ、かつ、SD2の西岸と同方向に延びることから、上流から流れてくる水をこの部分で主にSD2に分流させ、一定量の水を確保するためのものと考えられる。

堰状遺構2 SD1の東端部にある杭を中心とした遺構で、遺構の範囲は南北約5m、東西5m以上を測る。杭の打込み方には顕著な規則性は見出されないが、一部に



第4図 堰状遺構1（東より）

10本の角杭を密に一列打ち込んである部分がみられる。また、幅約30cm、厚さ5cm～6cmの割板材を深さ約2mほどもしっかりと打込んである部分が2カ所確認された。この遺構の持つ性格については不明の部分が多く判断はできないが、打込まれた杭の周囲に多量の流木が引掛けたような状況で出土したことなどから、シガラミのような機能を有したものであると考えている。

この他に調査区の各所に沼状あるいはよどみ状の窪地が存在しているが、いずれも遺物は含んでいない。

遺物出土状況 北地区からは古式土器（庄内式土器）を中心として木製品など多量の遺物が出土したが、出土土器の大多数は11カ所検出された土器群からの出土である。うち、遺構に伴うと考えられるのはSD1湾入部上層の上器群1、SD2上層の土器群2の2カ所で、他は溝状遺構の辺付近に平面的に堆積していた。

土器群3 SD3東岸の一帯で、比較的小片が集中している。

土器群4 SD3の西岸に堆積したもので上器群3と同じような様相を呈し、時期的にも変わらないと考えられる。

土器群5 トレンチ南東コーナー付近に平面的に堆積した一群であり、遺構からは最も離れた位置にある。

土器群6 SD1湾入部の東側にあたる。6m×5mほどの範囲の中に、比較的小さな土器群が散在している。数個体分の甕、壺が重ねられたような状態で出土している部分のあることや、土器が倒立した状況で出土しているものがあることなど、自然堆積とは考え難い面があり、これらの土器群の性格を考える上での糸口となるかもしれない。

土器群7 SD1堰状遺構2の西岸付近に4m×2mの範囲で密集して土器が検出された部分であり、出土量の最も多かった所である。

土器群8 トレンチ北西コーナー、SD1の西岸から出土した一群であり、小範囲から集中して出土している。

土器群9 SD1、SD2の上流部の西岸に3カ所の小さな土器群によって構成されたものである。

土器群10 SD1堰状遺構の西岸に位置するものである。

土器群11 土器群6の下層10cm～15cmの所に位置する。

以上のように出土された土器群は11をのぞき3条の溝の中およびその周辺に、ほぼ同一層に集中しており、人為的に堆積された痕跡を留めているものが多い。

4. 遺 物

(1) 土器

北地区からは、溝状造構および土器群から全容を観察し得る多量の上器が出土した。ここでは出土土器のうち主要なものを報告する。

壺 (1) <上器群1>は、体部上部にヘラ状工具による記号風の文様が施される。(2) <土器群1>は、体部下半に光沢のある炭化物が付着しているが、この部分に瘤目状に炭化物の付着していない部分がみられる。この瘤目痕を観察すると、編み方は基本的には数条の細かい材料を用いた不規則な六ツ目編みであるが、底部付近は器体を包み込むためか、編み目はくずれている。外面付着の炭化物はあたかもいぶされたような感がある。細頸壺(3) <土器群1>は、外面をヘラミガキ、体部内面はナデとハケ目で調整する。弱い片口をもつ小形の長頸壺(4) <上器群11>は、外面に粗いハケ目を施す。脚付長頸壺(5) <土器群2>は、内外面にヘラミガキを施している。脚付短頸壺(6) <土器群11>は、短い口縁をもつもので、体部上半をハケ目、下半にナデ仕上げを施す。脚付無頸壺(7) <SD1>は、弱い片口をもつもので、ハケの後ナデ仕上げをするが、粗雑な仕上げである。

甕 受口状口縁をもつ甕(8・9・10)には、文様などにより個体差がある。(8) <上器群6>は、屈曲部外面に櫛描文と棒状浮文を貼りつけたものである。体部外面にヘラ描の斜格子文がみられ、円形浮文が貼りつけられる。(9) <土器群11>は、内外面をハケ目調整する。(10) <土器群2>は、屈曲部に刺突文を施し、脚台をもつ。くの字状に外反する口縁部を上方につまみあげ丸くおわる甕(11) <土器群3>は、体部外面に右上りのやや粗いタタキをもつ、有段口縁で外面に擬凹線をもつ(12) <土器群3>は、内面に2段構成のヘラケズリを施す。(13) <土器群9>は、擬凹線をめぐらした有段口縁をもつ脚付のもので、内外面全体にヘラミガキを施す。

鉢 受口状口縁をもつ(14) <土器群10>は、刺突列点文、櫛描直線文をもつ。(15) <SD1>は、手捏ね成形の小形のものである。脚をもつ(16) <土器群3>は、外面をハケ目の後ナデ仕上げをしており、外面の全体に炭化物が付着している。有孔

鉢（17）<土器群11>は、外面上半をハケ目の後ナデ仕上げをしている。

高坏 いずれも内外面をヘラミガキする。（18）<SD1>は、口縁内面を肥厚し12条の横描直線文を施す。（19）<土器群7>は、坏部の屈曲が中位にあり、脚裾部の大きく開かない中形のものである。（20）<土器群1>は、有段口縁の外面に擬凹線をもつ。

器台 （21）<土器群10>は、口縁外面を垂下させ外面に擬凹線をもち、内外面をヘラミガキする。（22）<土器群7>は小形で、内外面をヘラミガキした無孔のものである。

その他 SD1より 6.5 cm × 4.7 cm、厚さ 0.75 cm の方形有孔土板が出土している。

以上出土土器の概要を述べたが、近江独自の特色をもつもののはかに、他地域からの影響を受けたものがある。有段口縁をもつ（12）・（13）・（20）は、丹後～北陸地方にかけてみられるものであり、くの字状の口縁をもつ（11）は、畿内の特色をもっている。（10）は湖北地方に多くみられるものであり、（3）・（20）は伊勢湾地方の特色を備えている。

（2）木製品

SD1から数十点の木製品・加工木が出土しているが、形状の明らかなものとして、次のものがある。

（1）は蓋と思われる。直径22.0 cm、厚さ 1.7 cm の円板に、2カ所、長さ約 3 cm の耳が付く。そしてこの部分に直径約 1.0 cm の孔が穿たれており、使用による磨滅痕がみられる。一部焼けこげている。針葉樹の征目。

（2）は四脚付盤である。半分欠損しているが、直径 25.7 cm の円形の盤の 1 カ所に把手が付く。厚さは中央にいくほど薄くなっている。裏には約 3 cm × 3.5 cm、高さ約 1.2 cm の方形の脚が付き、内外面に丸ノミによる整形痕がみられる。針葉樹。

（3）は広鍬である。現存長 31.2 cm、復元頭部幅約 16.3 cm、復元刃部幅約 18 cm で、平面形は着柄部分でくびれる。長さ約 14.5 cm、厚さ約 2.2 cm の逆三角形状の舟形突起がつくられ、着柄孔は直径約 3.5 cm、着柄角度は約 70 度である。前面の着柄孔の上部に真横に溝が加工されているが、ここに柄を固定するための横木をさしこむものと思われる。広葉樹。

（4）は有頭棒である。細い棒の先端部を紡錘形に削出したもので、一方は欠損して

いる。現存長約43.8cm、最大幅2.1cm。針葉樹。

(5)は長柄付木製品である。身と柄が一本作りで、全長99.5cm、柄の幅は3.9cm～4.6cm、厚さは2.3cm～2.7cm、身の幅は10.5cm、厚さは約1cmである。身の平面形は長方形を呈し、後面は平坦である。広葉樹。

(6)は梯子である。残存長78.6cm、幅約11.5cm、厚さ2.8cm～6.8cmで、足かけは2段残っており、高さ4cm、間隔は34.8cmである。全体に破損が著しい。針葉樹。

(7)は組み合せ材である。現存長43.6cm、幅7.2cm、厚さ2.2cm～2.8cmで、凹状になっている。端部は1.3cm×3.1cmの方形の孔が穿たれ、約80度の角度で短い木片が挿入してある。全体に焼けこげている。針葉樹。

この他に(8、9)のように、盤か槽になると思われる容器の木片もあるが、形状ははっきりせず、今回は写真のみ掲載した。

5. 小 結

北地区からは、3条の自然流路が検出された。特にSD1には2カ所の堰状遺構があり、いずれも水流調節のためのものである。同種の遺構は古墳時代初頭ごろより各地の遺跡で認められるようになる。また当地区からは多量の遺物が出土した。このうち土器は同時期の針江遺跡や森浜遺跡などの土器とくらべると日本海側や湖北、伊勢湾地方など地方色の強いものが多く認められ、地域間交流の有様を示す良好な資料群である。これら遺構、遺物の年代については、周辺地域との関連をもつ土器などからみて、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての年代を考えている。

第4章 針江南遺跡の調査

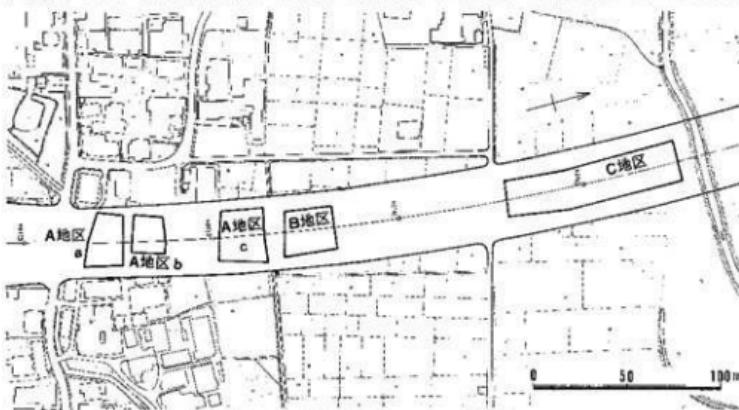
1. 遺跡の概要

調査対象のバイパス工事予定地内における針江南遺跡は、針江大川を北限に南は霜降と深溝を結ぶ県道にまで広がる。本遺跡については昭和57年度の試掘調査で、上層に平安時代、下層に弥生時代中期の遺物包含層および遺構が重複していることが明らかになった。

今回の調査地は、途中農道で分断されており、調査の便宜上南端の県道よりそれぞれA地区、B地区、C地区とした。ただしB地区は、今年度全面積の約 $\frac{1}{6}$ を調査したにとどまった。

2. 層位

基本層位は、A地区では第1層・表土（耕土）、第2層・茶灰色粘砂土層、第3層・砂疊層で、各層の厚さは第1層約1m、第2層約10cm～15cmであった。このうち第2層中には、中・近世の陶磁器や土師器の破片が混在する。B地区、C地区では第1層・表土（耕土）、第2層・暗茶灰色粘質土層（遺物包含層）、第3層・青灰色粘質土層からなり、各層の厚さは第1層約40cm、第2層約20cm～30cmであった。このうち第2層中には、弥生時代中期の土器と平安時代の灰釉陶器や綠釉陶器、須恵器、土師



第5図 針江南遺跡トレンチ配置図

器などの破片が混在する。この第2層を除去すると、第3層の上面で遺構が検出された。

C地区は、基本的にB地区と同じ堆積であるが、その南端と北端の比高差が約50cmあり第3層の遺構検出面は、北に向って緩やかに傾斜していた。

3. 遺構

(A地区の遺構) A地区は、第3層の砂礫層上面が遺構面と考えられるが、明確な遺構は、認められなかった。

(B地区の遺構) B地区では、溝、中世小溝、土坑、ピットなどが検出された。

(1) 溝 SD1 トレンチの北側中央から東西に流れる溝で、溝幅は調査区東側で2.2m、西側1.5m、深さは30cm～40cmを測る。溝内からは、平安時代前期の土師器や須恵器などが數十点出土した。

SD2 溝幅30cm～40cm、深さ15cm、SD1の南東部で検出された。

中世小溝 (SD3) 溝幅30cm～40cm、深さ約20cmでトレンチの南東部で検出された。

(2) 土坑 SK1 長軸5.3m×短軸2.5mの楕円形の土坑で、深さ20cmを測る。土坑内からは、弥生時代中期の破片が数点出土した。

(C地区の遺構) C地区では、掘立柱建物、旧河道、溝、中世小溝群、土坑、ピット群など比較的まとまりのある遺構が検出された。

(1) 掘立柱建物 建物は、2棟確認されさらに建物を囲むように小溝 (SD13) が検出された。

SB1 周溝の内側に位置する、桁行2間×梁行1間の南北棟の建物でSB2と一部重複する。柱穴の重複状況よりみて、SB1はSB2より新しいものと思われる。

SB2 SB1の南側にある、南北方向に2間、東西方向に2間の建物で西側では、直径20cmのやや小さな柱穴が2カ所平行に認められる。

(2) 旧河道 旧河道1 トレンチの北端に位置し針江大川に接する。溝幅は最長で約5m、最短は1m、深さ40cmを測り、東西方向に約18m検出した。上層では、平安時代後期末から鎌倉時代初頭の土器片が数点出土し、下層では、溝の底に近いところから弥生時代中期の土器が数点出土した。

旧河道2 旧河道1の南に位置する。溝幅は5m～7m、深さ30cm～60cmを測り、東西方向に約18m検出した。溝内の堆積のうち、上層では平安時代後期末から鎌倉時代初頭の土器が数点出土し、下層では溝の底に近いところから弥生時代中期の土器が数点出土した。

(3) **溝 SD1** レンチの南端に位置し、東西方向に延びる溝で長さ17m検出した。溝幅は2.5m～4.7m、深さ50cm～1.1mを測る。溝内の堆積は、大きく分けると上層が淡茶灰色粘質土、下層は茶灰色粘質土であった。遺物は、弥生時代中期の土器が数十点出土した。

SD10・SD11 SD1の北側に位置し溝幅約80cm～90cm、深さ約10cm～20cmで中央にむかって緩やかに落込む。溝というよりも凹地表面の窪みかと思われる。

SD12 SD10より北に約10mの所に位置する。溝幅約30cm～50cm、深さ20cmを測る。溝内からは、土師器、黒色土器や灰釉陶器の少片が出土した。

中世小溝群 (SD2～SD9) C地区の南端で8条の小溝が認められた。この小溝群の溝内からは、土師器、陶器の少片が出土しており、溝の時期については古くても中世、新らしくとも近世の所産と考えられる。

(4) **土坑 SK1** SD1の北側約10mに位置する。長軸8.4m×短軸3.5mの不整形な土坑で、深さ約20cmを測る。土坑内からは、数片の弥生時代中期の土器が出土した。

SK2 長軸80cm×短軸70cmの楕円形の土坑で、深さ約15cmを測る。

SK3 長軸1.4m×短軸1.1mの楕円形の土坑で、深さ20cmを測る。土坑内からは、数点の弥生時代中期の土器片と木材片が検出された。

SK4 長軸1.6m×短軸1.2mの土坑で、深さ20cmを測る。

SK5 長軸1.1m×短軸70cmの土坑で、深さ20cmを測る。

SK6 長軸2.4m×短軸1.1mの楕円形の土坑で、深さ約15cmを測る。

SK7 直径約90cmのほぼ円形の土坑で、中央より東よりで直径約30cmのピットが認められ、深さは30cmを測る。

SK8 長軸70cm×短軸50cmの土坑で、深さ15cmを測る。

SK9 長軸2.8m×短軸1.5mの楕円形の土坑で、深さ15cmを測る。土坑内からは、数点の弥生時代中期の土器片が認められた。

- SK10** 長軸 1 m × 短軸 60 cm の土坑で、深さ 20 cm を測る。
- SK11** 長軸 1.2 m × 短軸 60 cm の土坑で、深さ 15 cm を測る。
- SK12** 長軸 1.1 m × 短軸 85 cm の楕円形の土坑で、深さ 20 cm を測る。
- SK13** 長軸 80 cm × 短軸 40 cm の土坑で、深さ 30 cm を測る。
- SK14** S B 2 の東側に位置し、短軸約 1.3 m × 深さ 20 cm を測り、土坑内からは木片が多量に出上した。
- SK15** 長軸 1.1 m × 短軸 90 cm の楕円形の土坑で、深さ 20 cm を測る。土坑の東端は、旧河道 1 で削平されている。土坑内からは、数点の弥生時代中期の土器片が出土した。
- (5) ピット群 旧河道 1 と旧河道 2 の間にと S B 1 から S B 2 の付近に直径 20 cm ~ 40 cm のピットが点在するが、現状では、建物としてのまとまりはないが掘立柱建物の柱穴の痕跡かと思われる。

4. 遺 物

(1) 弥生式土器

弥生式土器の大半は、包含層中より出土したもので、時期的には弥生時代中期中頃(第Ⅲ様式)のものが大部分を占め、ごく少量それより古い時期のものが混る。

前 期 壺 (1) は、ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部外面に 1 条のヘラ描沈線と、その上下に刻み目を施す。頸部には 8 条のヘラ描沈線が周る。

同じく前期と考えられるものに、水神平式の壺の口縁部が出土している。口縁部下方には指圧痕のある突帯を貼付け、器体外面を条痕文で埋める(第 6 図)

中 期 壺には、形態や文様などにより、かなりの差異が認められる。

口縁部が外上方にのびる壺 (2) は、単帶構成の横描直線文を口縁部から胴部にまで施し、しかも 1 回の動作で描いている。

(3・4・5) は、口縁端部を水平近くにまで外反させ、口縁部内面を横ハケ、端部に横描波状文を施すものである。外面の施文構成に横描文を多用する共通性をもつが、(3) は扇形文を施すなど細部において異っている。

(6) は太い径の頸部をもつ壺で、端部にハケ状工具によると思われる刺突文、頸部に 2 孔一対の穿孔、さらに肩部にかけて横描直線文と波状文を施す。

(7~9) は、内外面全体にハケを施すという共通点をもつが、口縁部をゆるやか

に外反させるもの（7）と、口縁端部を内屈させるもの（8・9）に分けられる。（9）には、口縁部外面にハケ状工具による刺突文が周っている。

（10・12～15）は、口縁部をゆるやかに外反させながら、端部のみを屈曲させていく。さらに、端部が内傾するもの（13・14）、端部が直立するもの（10・15）、端部が外傾するもの（12）に分けられる。文様は、口縁部外面と頸部を飾り、大形のものには棒状浮文を貼付ける。なお（14）は、口縁部外面に上下2段と頸部に条痕文が施されている。東海地方の朝日式の土器に類似するものである。

（16）は大形の無頸壺で、外面に単帯構成の櫛描直線文を施す。

甕には、口縁部を外反させ、内外面をハケとナデで整形した（18・19）と、文様をもつものとがある。（17）は、口縁端部に刻み目と内面に4条の櫛描波状文がみられる。（20）は、口縁部端部と内面に櫛描波状文を施し、頸部に連続櫛描直線文を周らせる。

（11）はハの字状に開き、2個一対の円孔をもつ蓋と考えられる。

（2）石 器

石器の中には、石鎌・打製刃器・大形石庖丁・小形柱状片刃石斧・砥石など数点が認められる。

石鎌（1）は、凹基無茎式石鎌で長さ3.9cm、幅3.0cm、重さ6.75gであり、その材質はサスカイトである。

打製刃器（2）と（3）で、（2）は最大長4.5cm、幅1.2cmで両刃部には加工痕がみられる。（3）は、最大長4.7cm、幅1.4cmで両刃部には加工痕がみられる。材質はサスカイトである。

大形石庖丁（4）は、扁平な石材を加工して作られており、残存部から復元して台形状になるとみられる。その穿孔部は、両方からあけられており、刃部は両面から研磨されている。材質は粘板岩である。

小形柱状片刃石斧（5）は、長さ6.2cm、幅1.3cm、重さ20.18gでその断面は部厚く、また刃部は長辺側で長軸方向に研磨されている。材質は鳴滝石である。

砥石は、（6）と（7）で（6）は、最大残存長5.6cm、幅5.6cmで断面は扁平な台形状であり、材質は硬質砂岩である。（7）は、最大長13.5cm、幅4.0cmで断面は逆台形状であり、表面は研磨されている。材質は鳴滝石である。以上の石器は、弥生

時代中期の包含層中より出土した。

(3) 歴史時代の土器

S D 1付近から、須恵器の坏が出土しており、その中には扁平な坏蓋の内面に、「蘭寺」とと思われる墨書の認められるもの（表紙）がある。坏蓋には、しっかりした宝珠つまみのつくもの（21）と、扁平な宝珠つまみのつくもの（22）がある。坏身には、高台の付くもの（23）と、つかないもの（24）がある。これら須恵器の年代は、平安時代前期（9世紀）と考えられる。

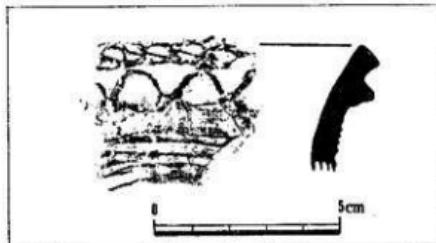
中世の遺物としては、土師器の皿がある。皿は、口径約9cm程の小皿（25・26）と、口径14.8cmの大皿（27）とがある。平安時代末期～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初頭）の時期が考えられる。

5. 小 結

包含層を中心に出土した弥生式土器は、文様に描文が多様され、凹線文が含まれていないことなどから、中期でも第Ⅲ様式の古段階のものと思われる。また、図式できなかった土器も含めて、第Ⅱ様式に遡る可能性のあるものも多少含まれ、中期の土器としては占相を示している。土器の構成では、高坏が非常に少ないと注意をひいた。時期あるいは地域色、遺跡の性格によるものか、今後の課題である。

石器の中では、大形石臼丁が1点出土している。このような大形の石臼丁は、県下でもほとんど例がない。

歴史時代の掘立柱建物は、溝で区画された屋敷地内に配置されたもので、溝内より出土した遺物よりみて平安時代末期～鎌倉時代初頭の時期が考えられる。大阪府高槻市宮田遺跡などにみられるように、中世前半期の農家の1つの典型であろう。



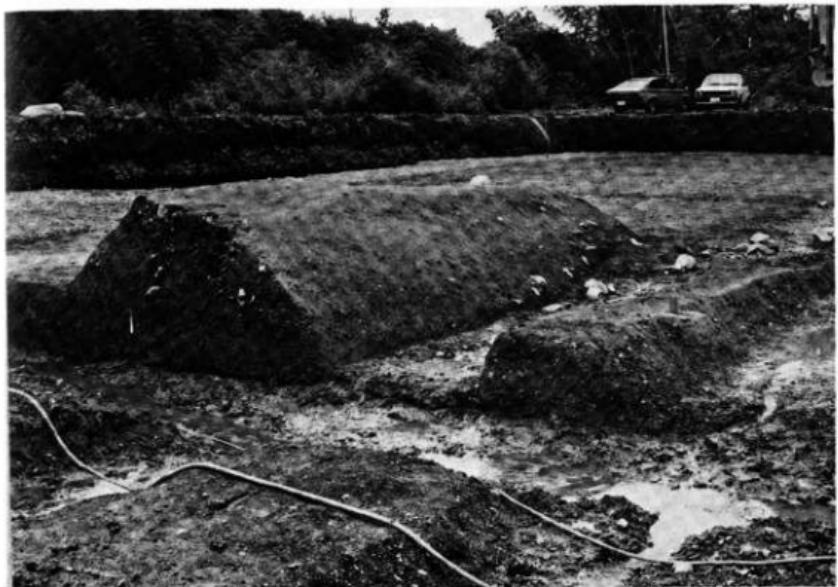
第6図 水神平式土器実測図



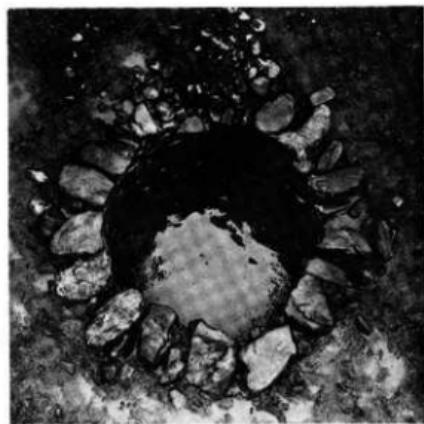
土星状遺構基底部（西より）



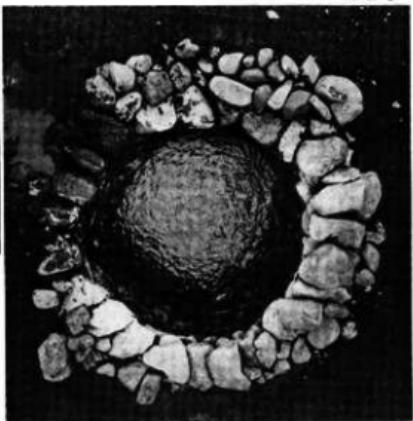
SD 1 および SD 2 (東より)



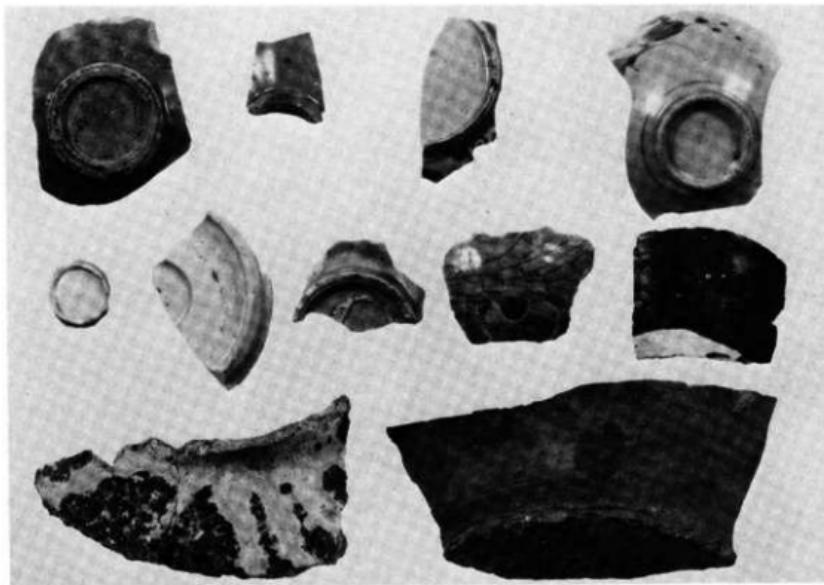
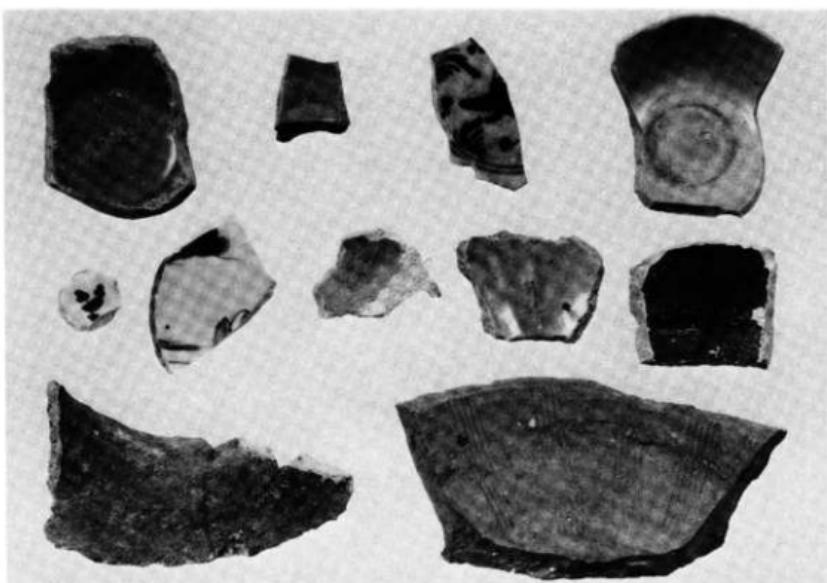
土壘殘存部



S E 3



S E 4

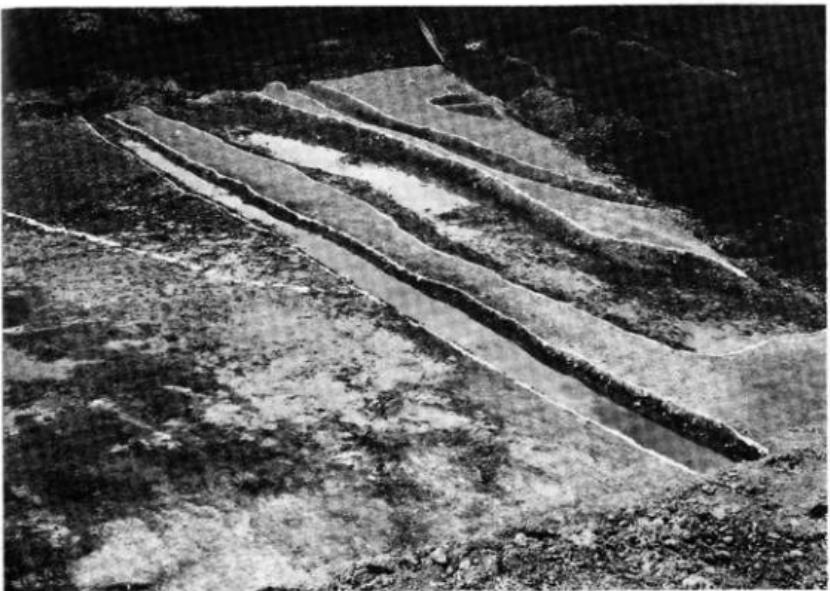




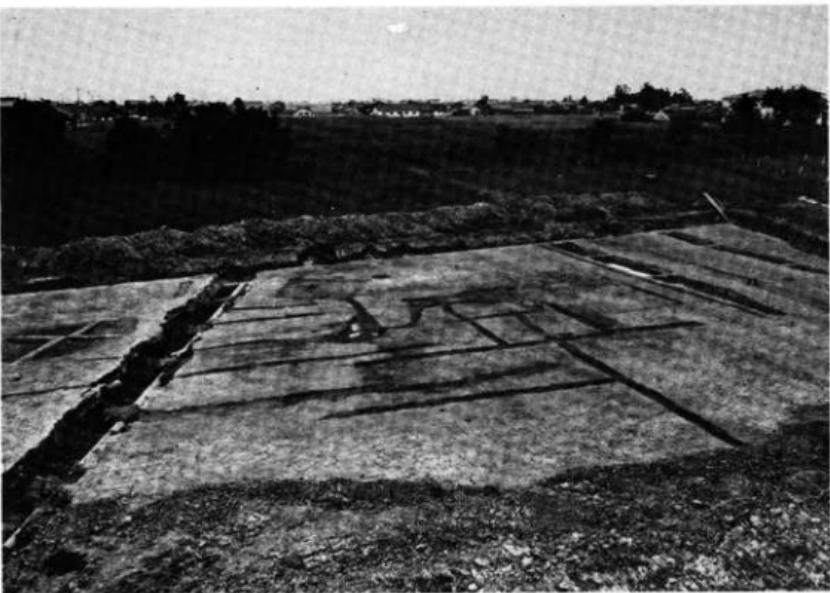
第4区～第5区全景（南西より）



第4区 SE 1周辺（北東より）



第5区北東端部 S D35周辺（南西より）



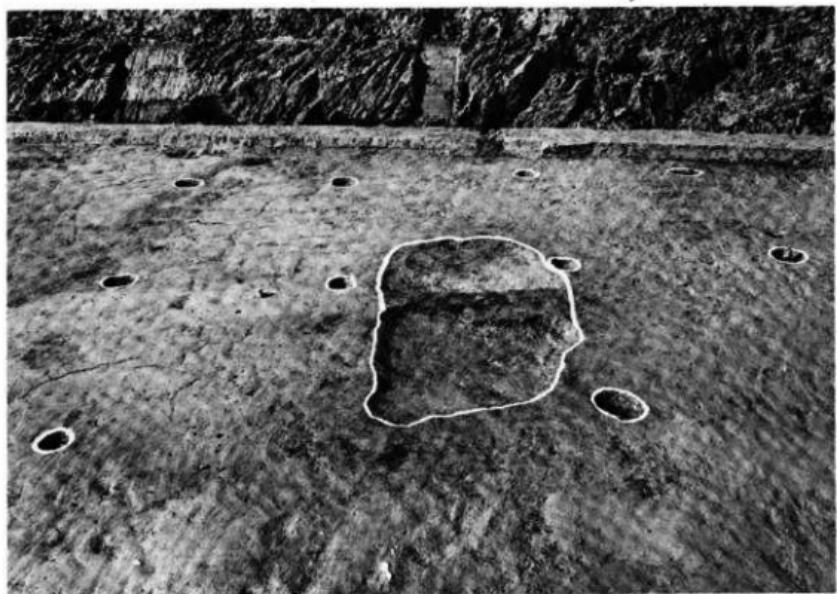
第5区 北半面全景（南より）



第5区 SB1周辺（南より）



第6区 SB2（北より）

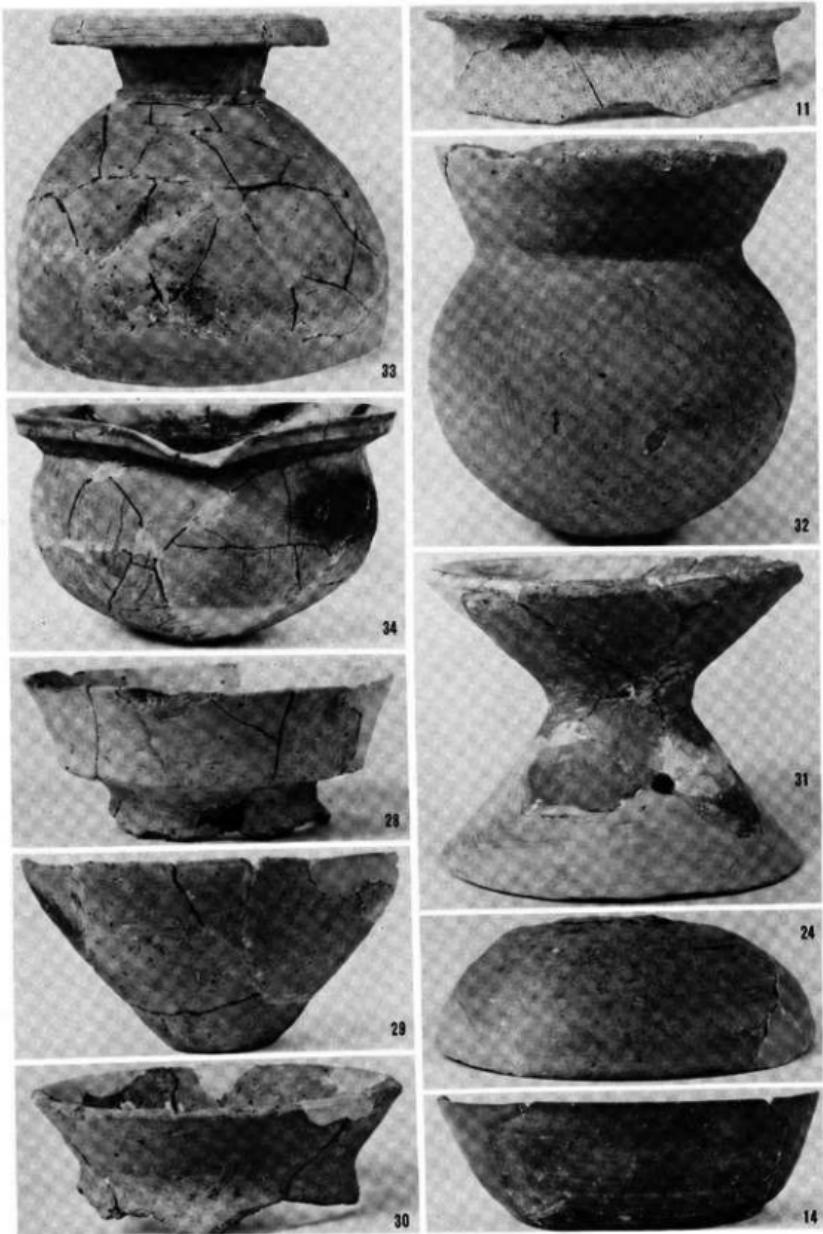


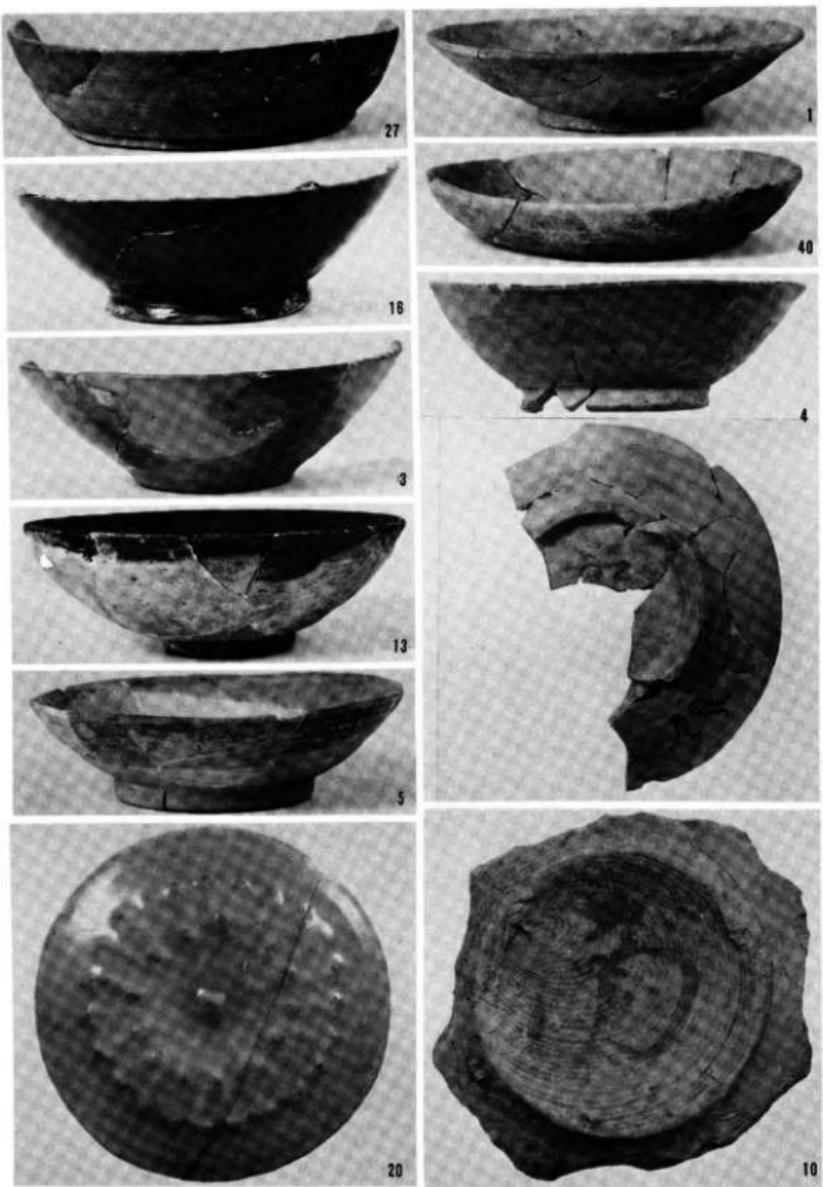
第7区 SB3 (東より)



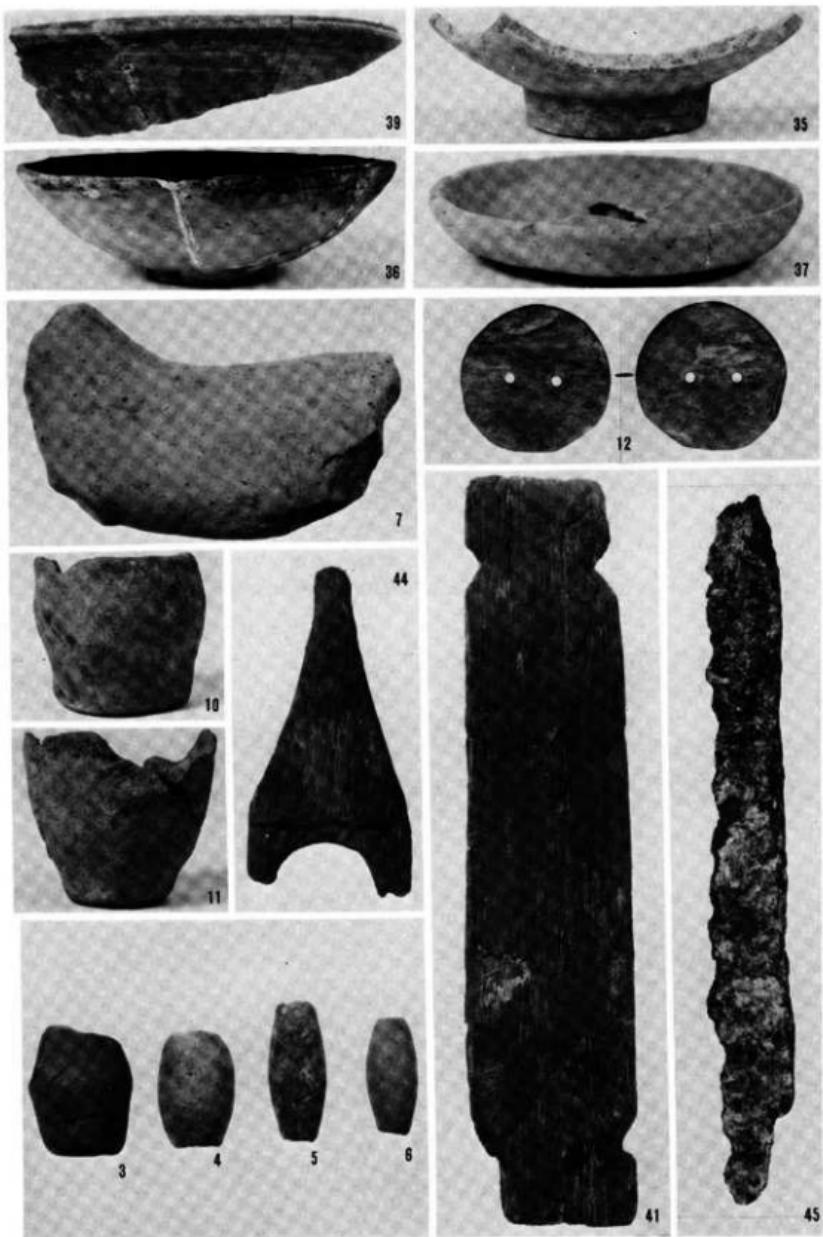
第8区 全景 (東より)

圖版八 正伝寺南遺跡（南地区）・遺物





図版十 正伝寺南遺跡（南地区）・遺物





全景（北東より）



堰状遺構 2（北より）

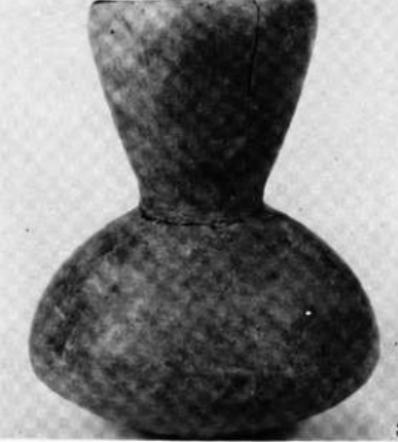
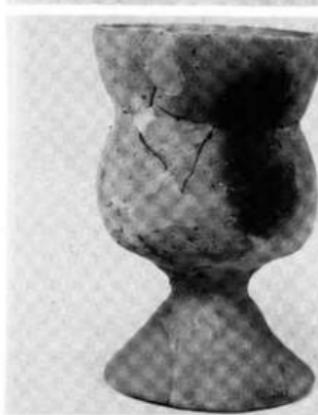


土器群1（西より）



土器群7（南より）

圖版十三 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物



圖版十四
正伝寺南遺跡（北地区）・遺物



圖版十五 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物



16



14



17



18



19



20

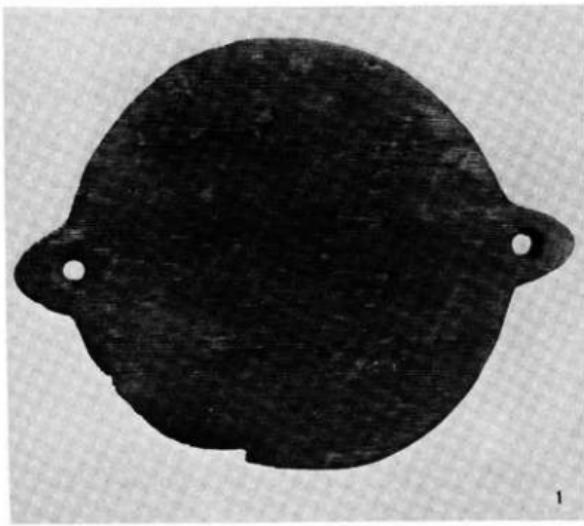
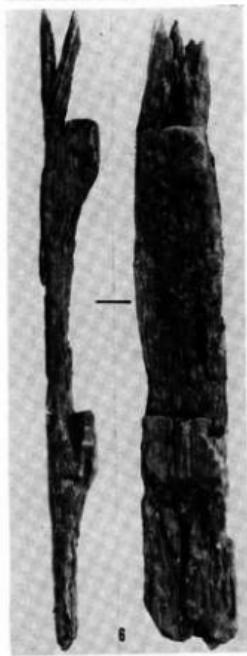
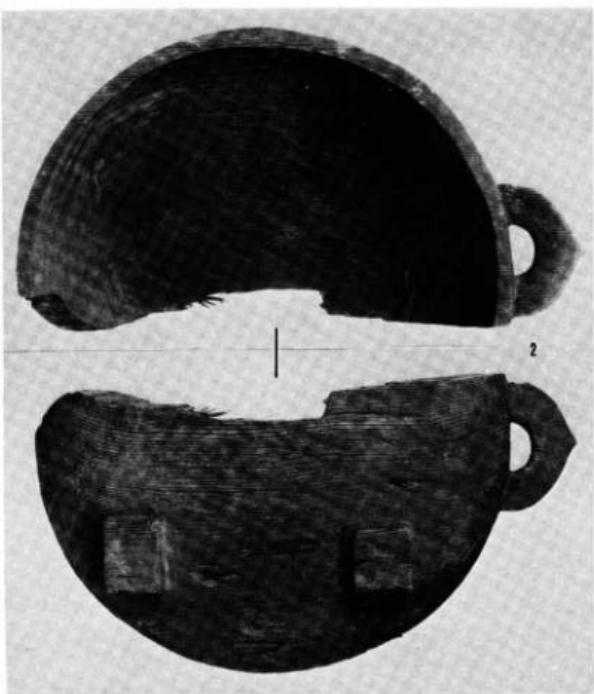
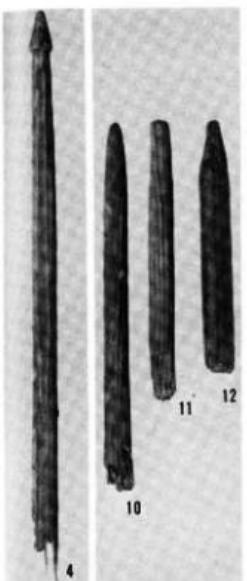


21

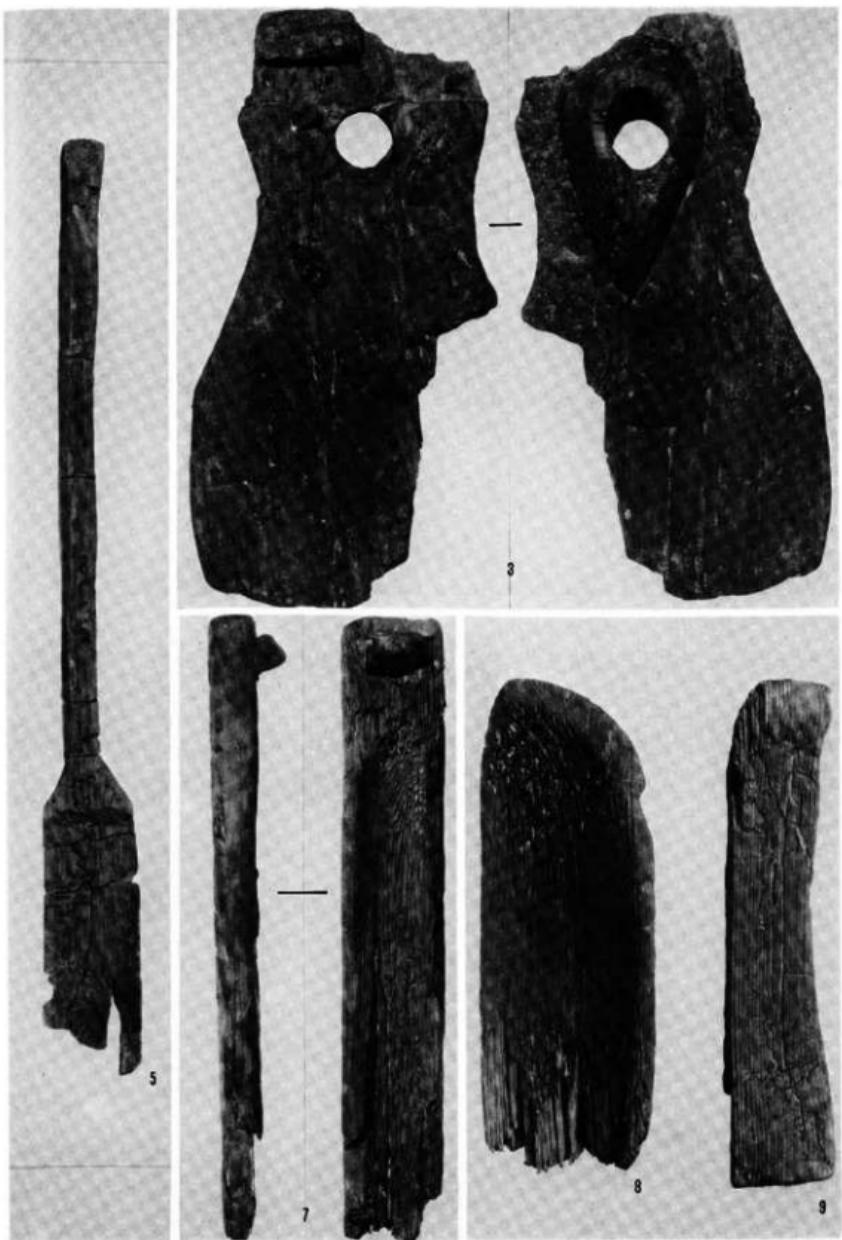


22

圖版十六 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物



圖版十七 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物

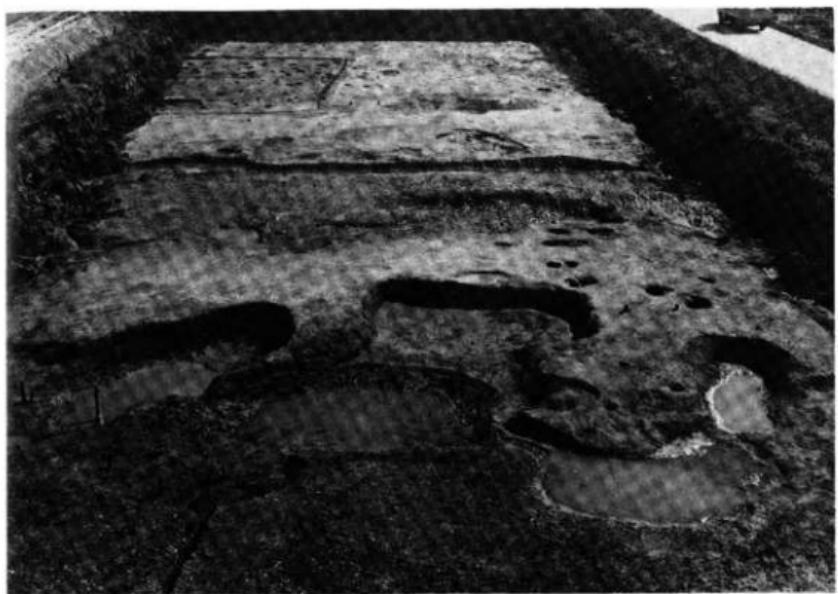




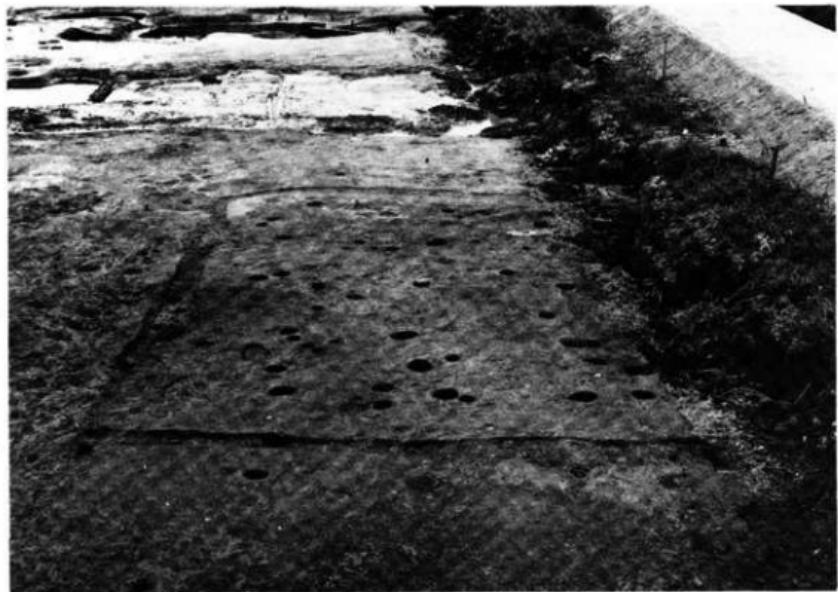
B地区全景（北より）



C地区全景（南より）

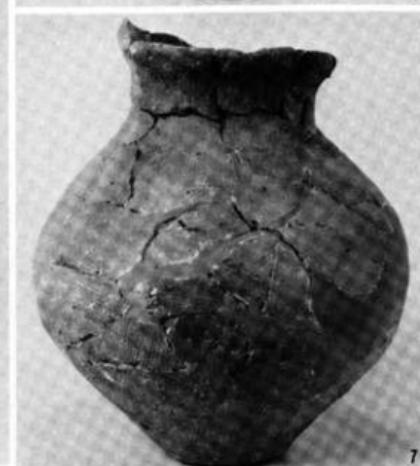
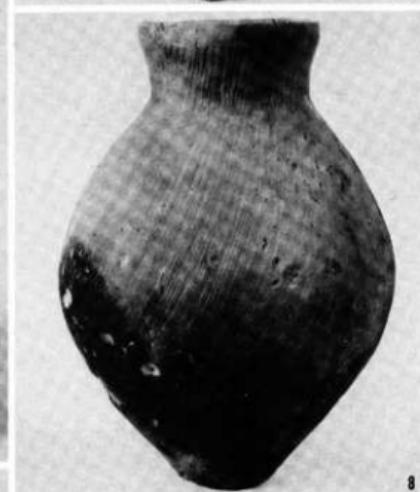


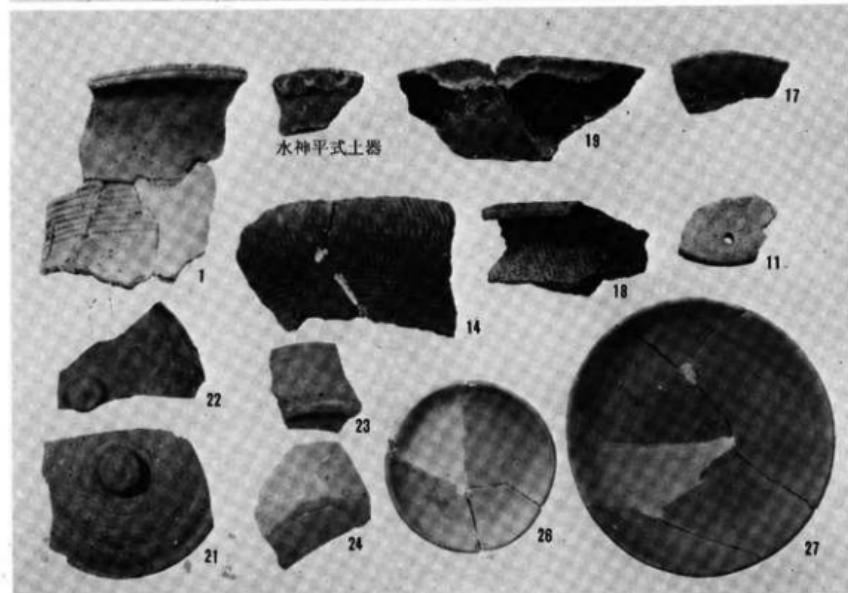
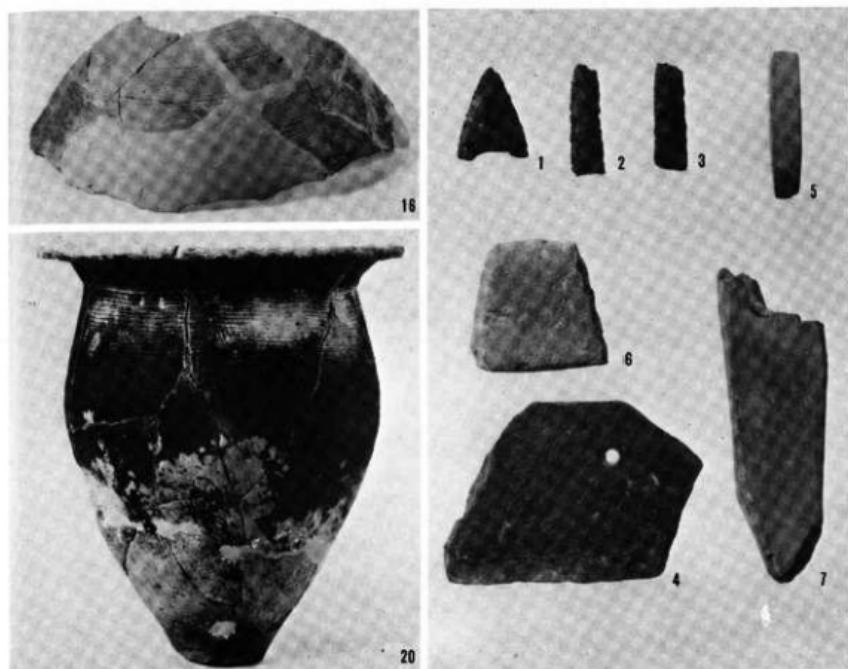
C地区全景（北より）



S B 1・S B 2（南より）

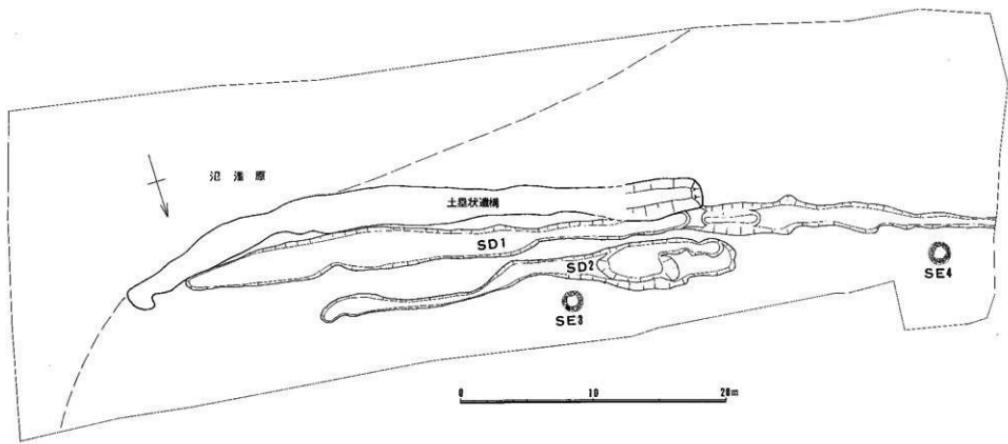




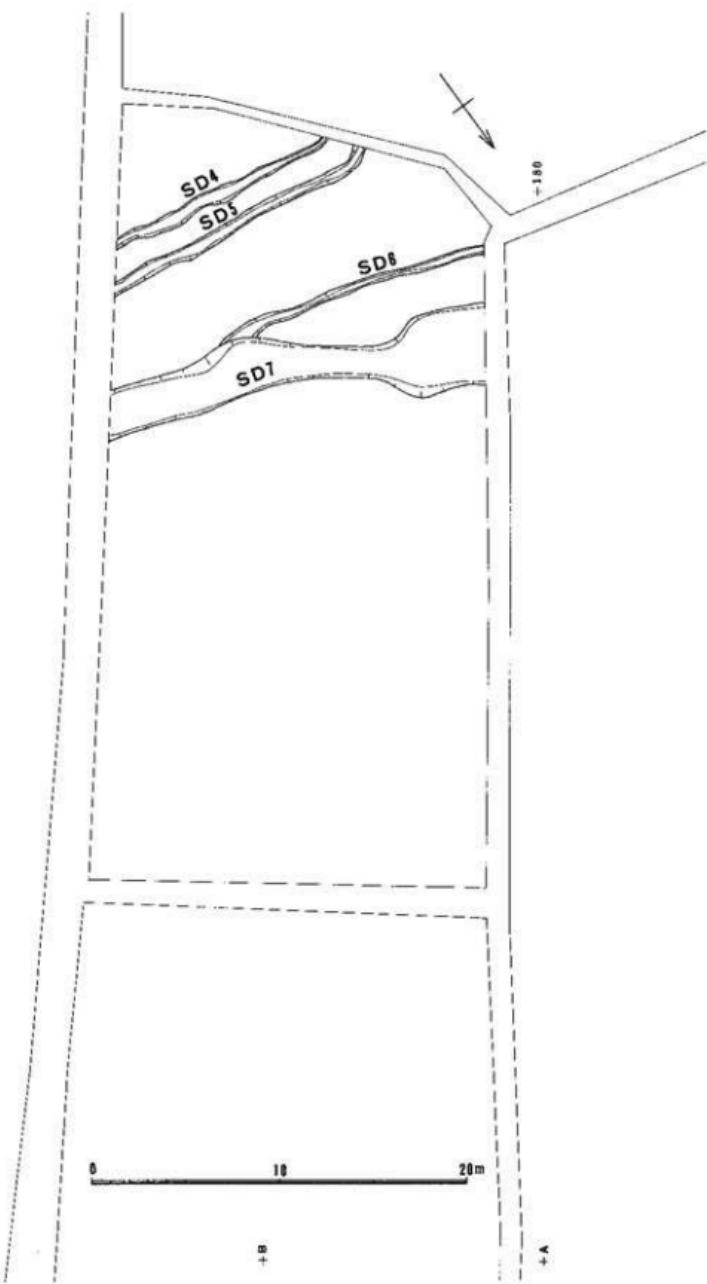




新旭町湖岸部における遺跡分布

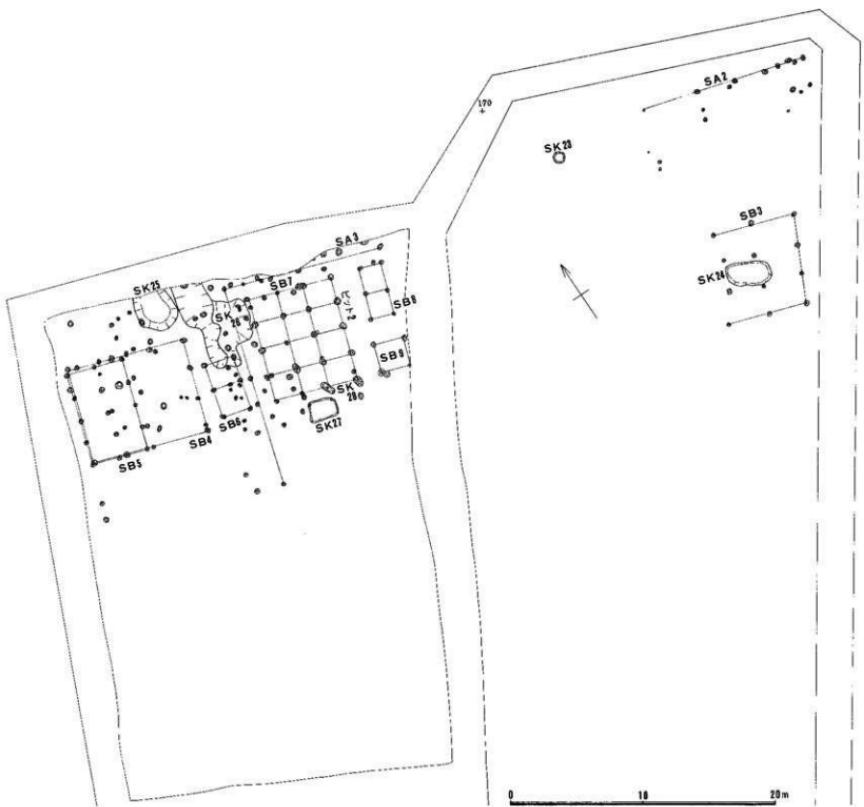


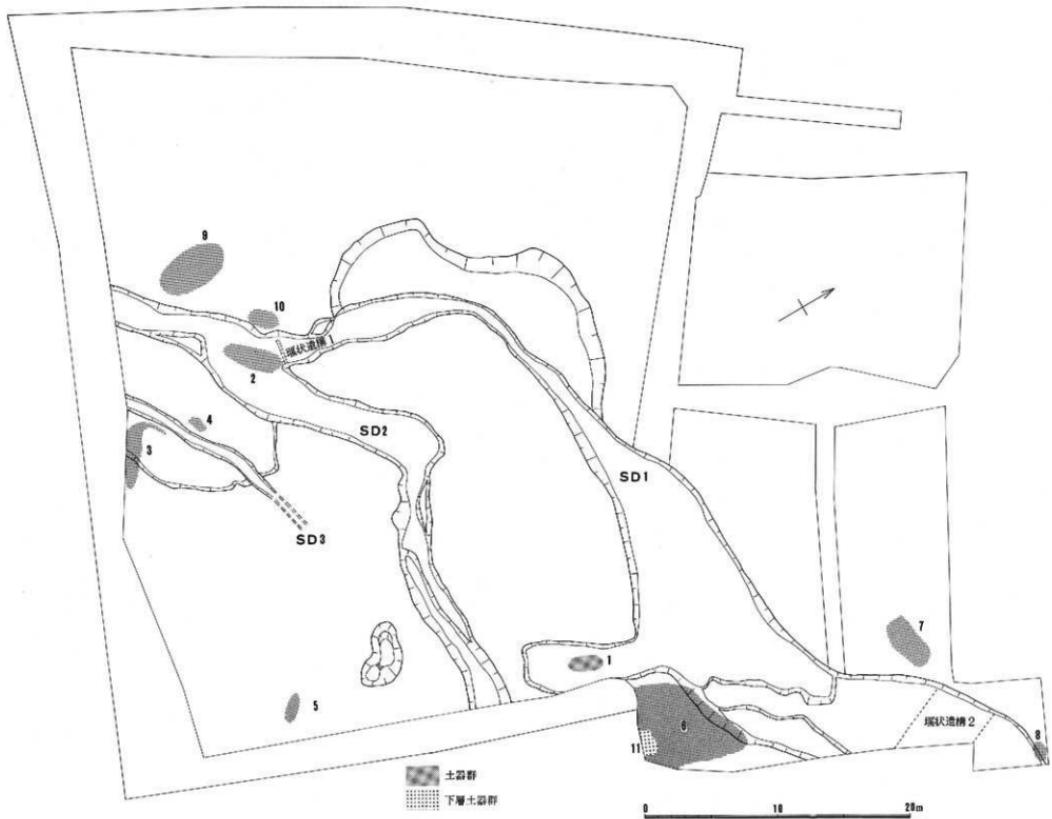
図版二五 正伝寺南遺跡（南地区）・造構平面図(1)



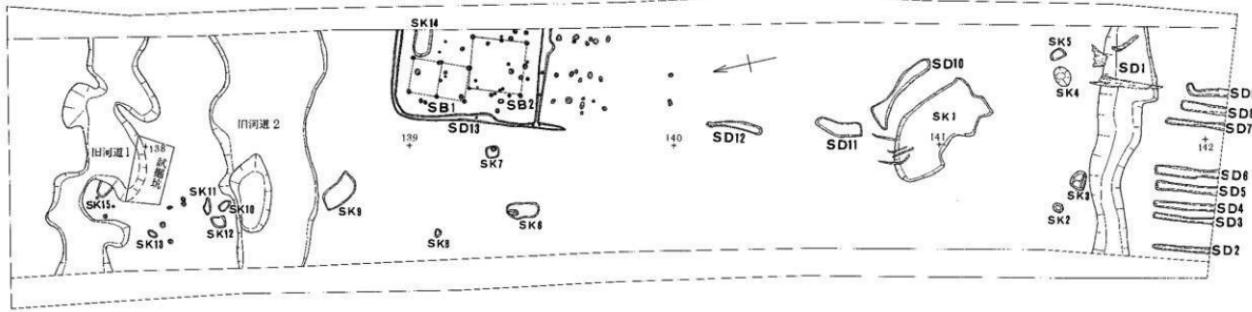


図版二七 正伝寺南遺跡（南地区）・遺構平面図(3)

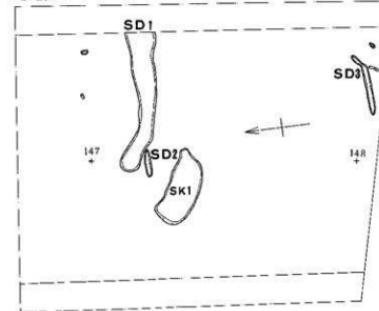




C地区

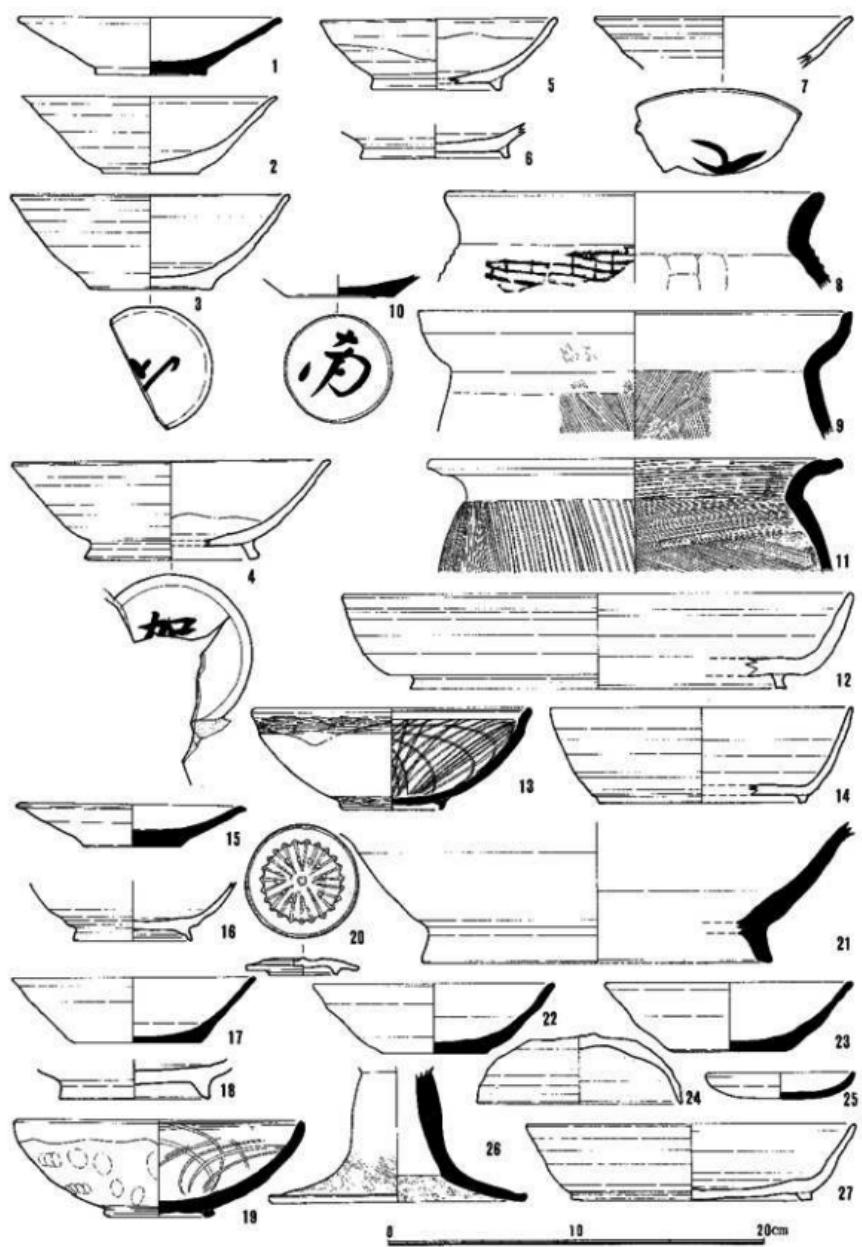


B地区

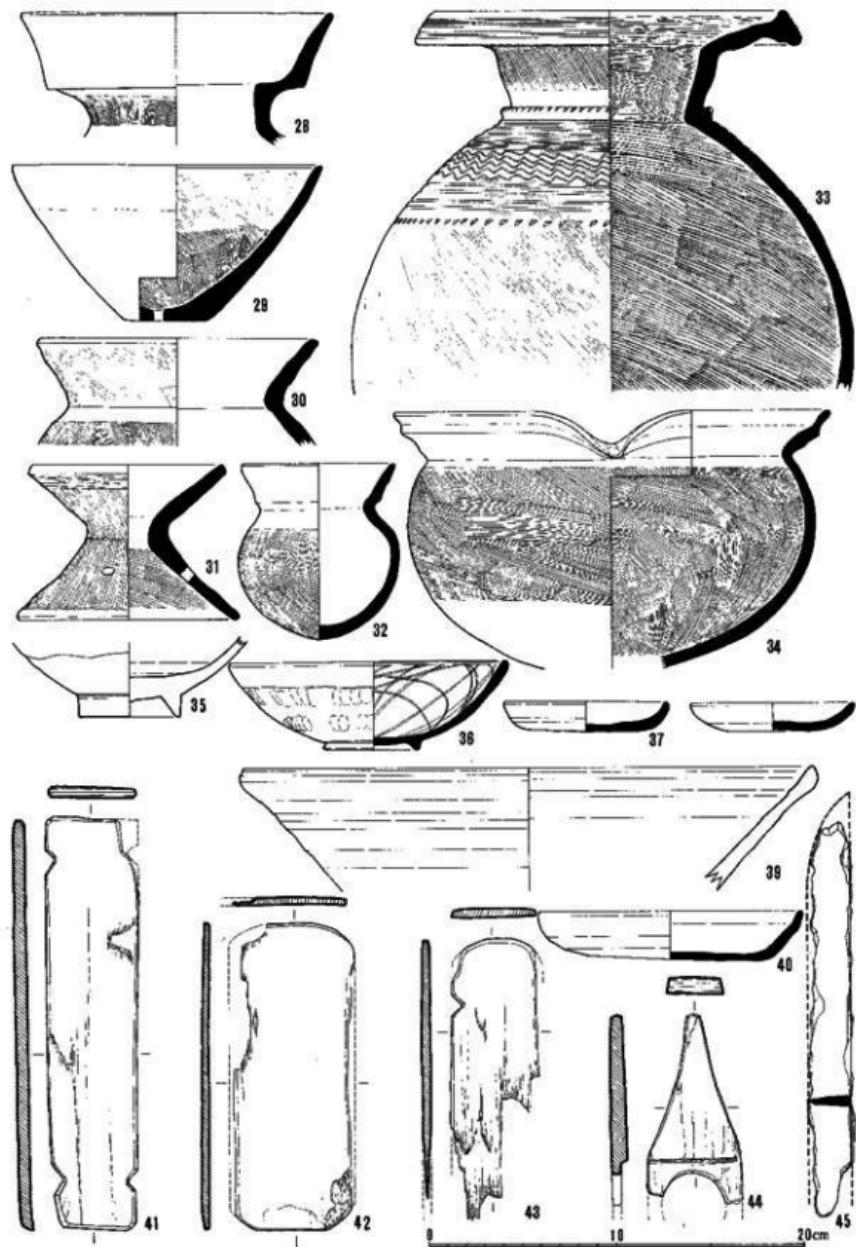


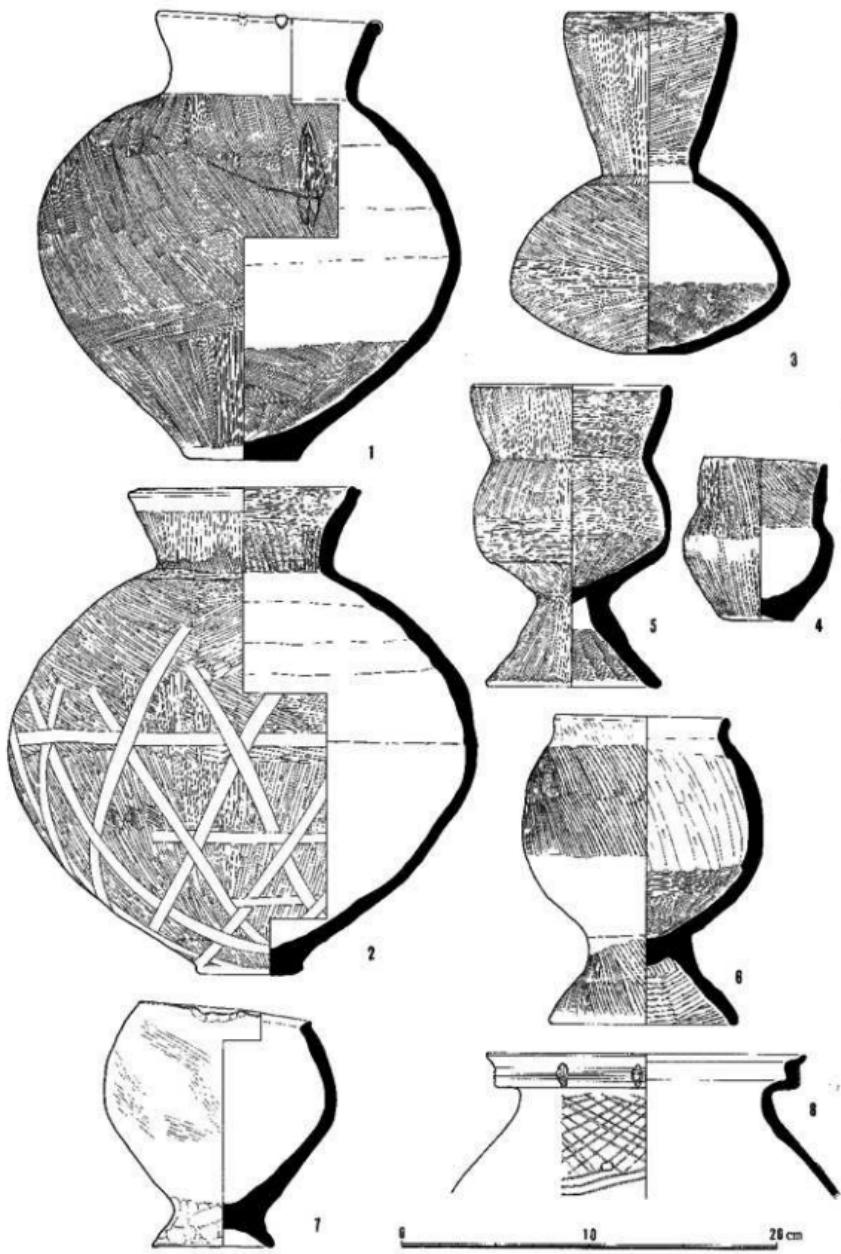
0 10 20 m

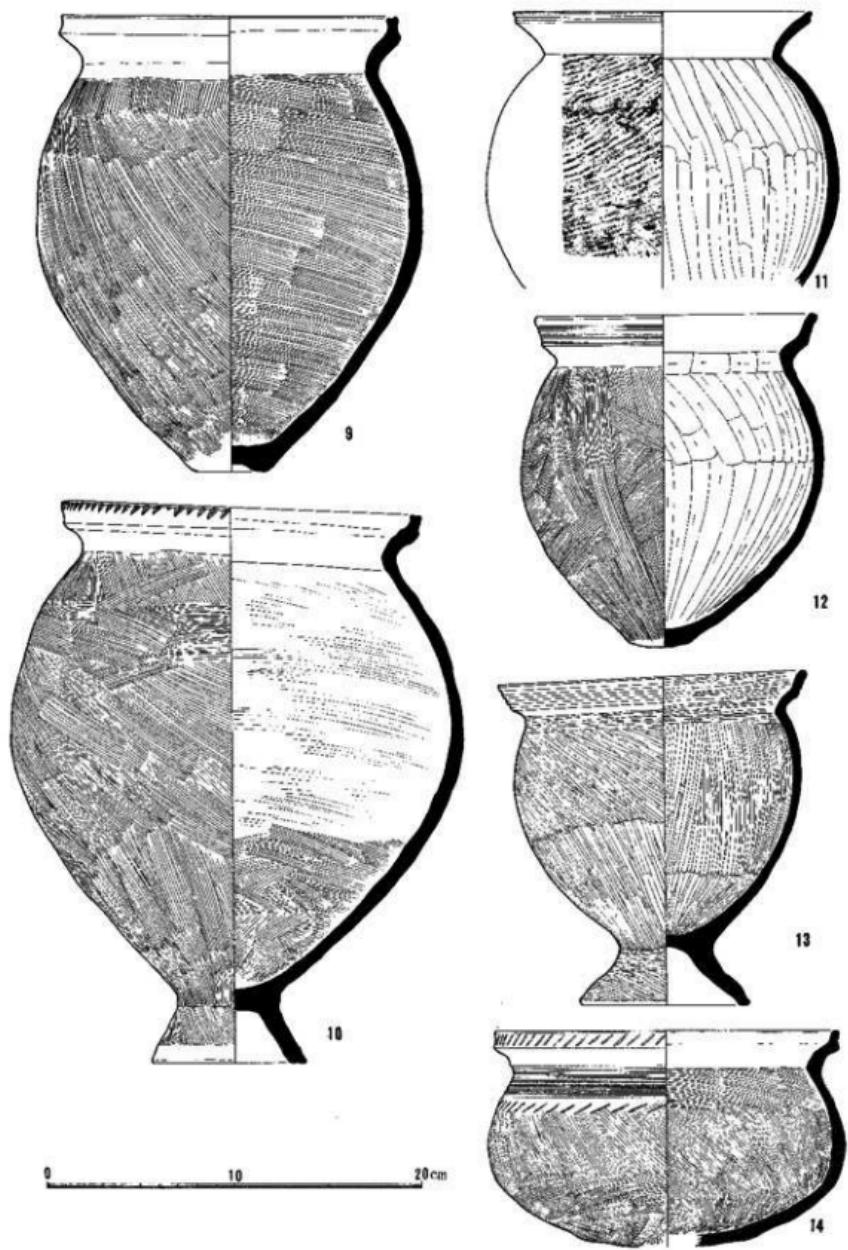
圖版三十 正伝寺南遺跡(南地区)・遺物実測図(1)



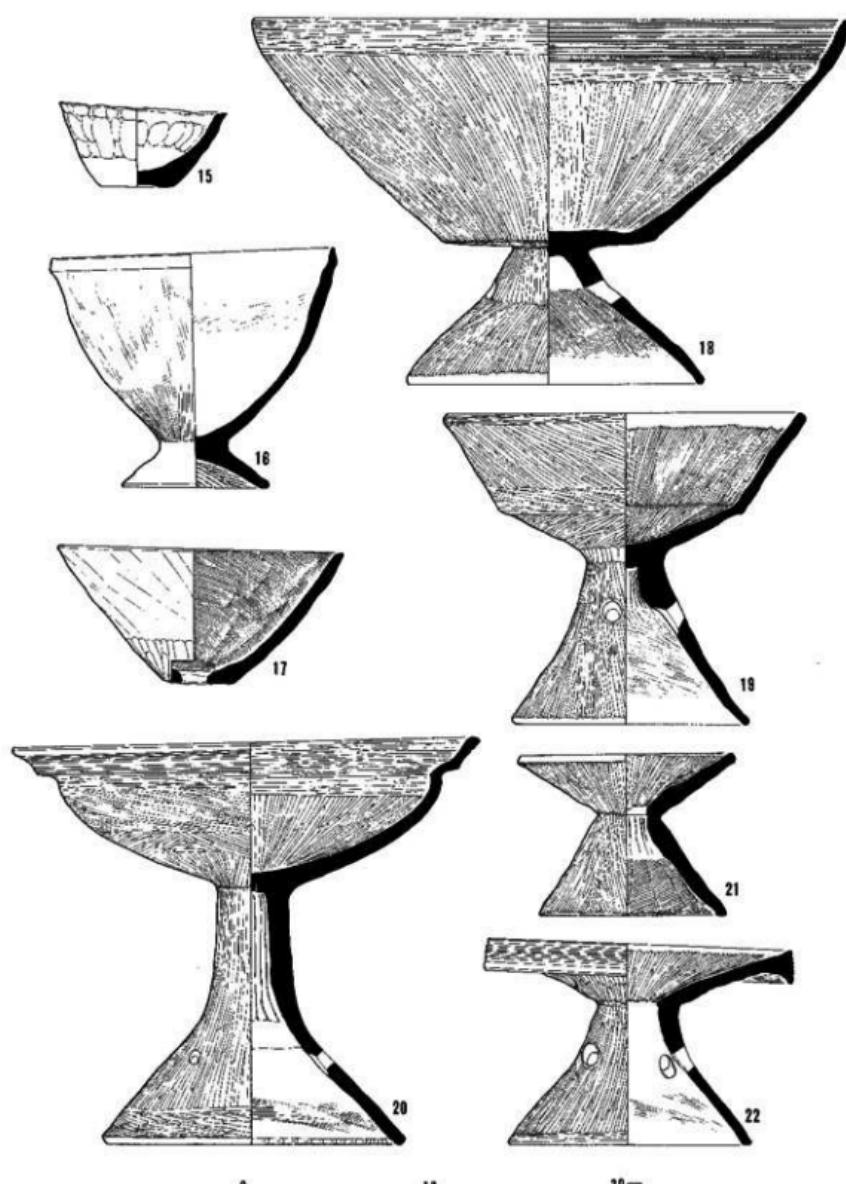
圖版三一 正伝寺南遺跡（南地区）・遺物実測図(2)





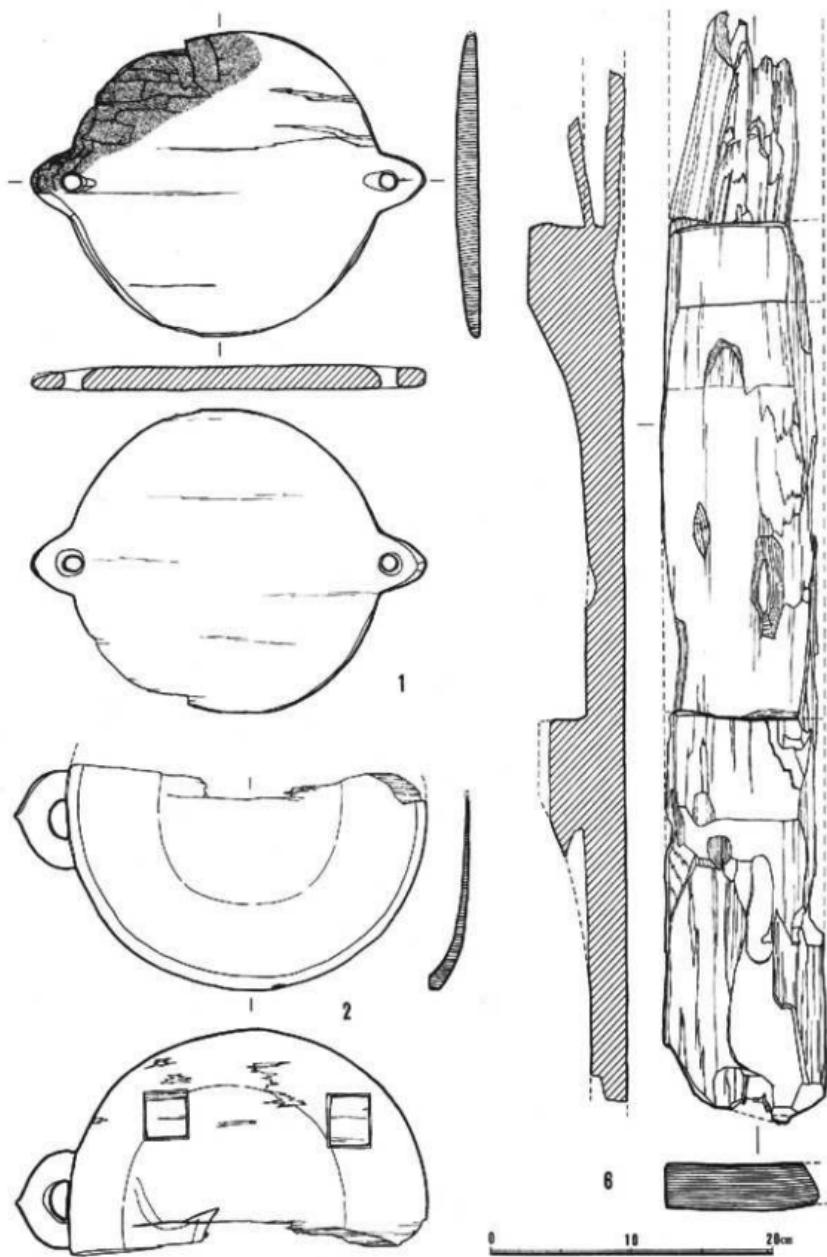


圖版三四 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物実測図(3)

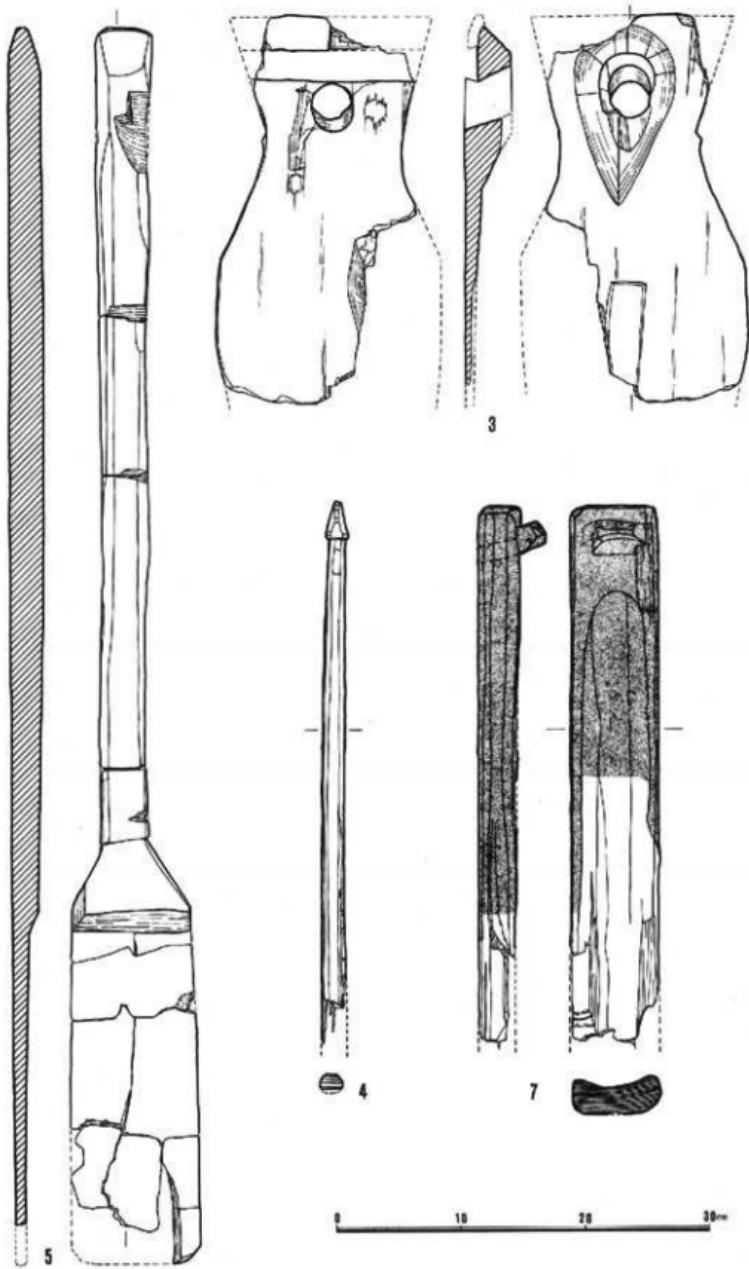


0 10 20cm

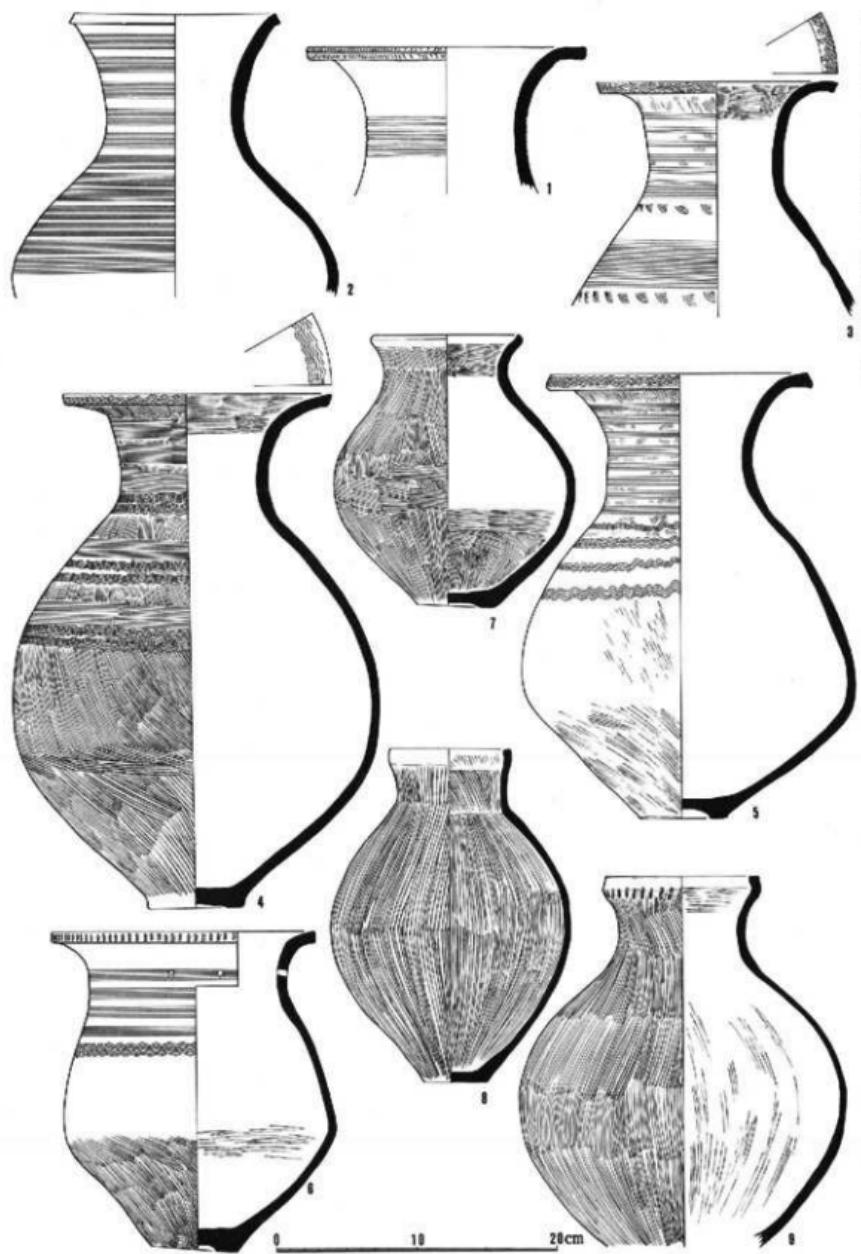
図版三五 正伝寺南遺跡(北地区)・遺物実測図(4)



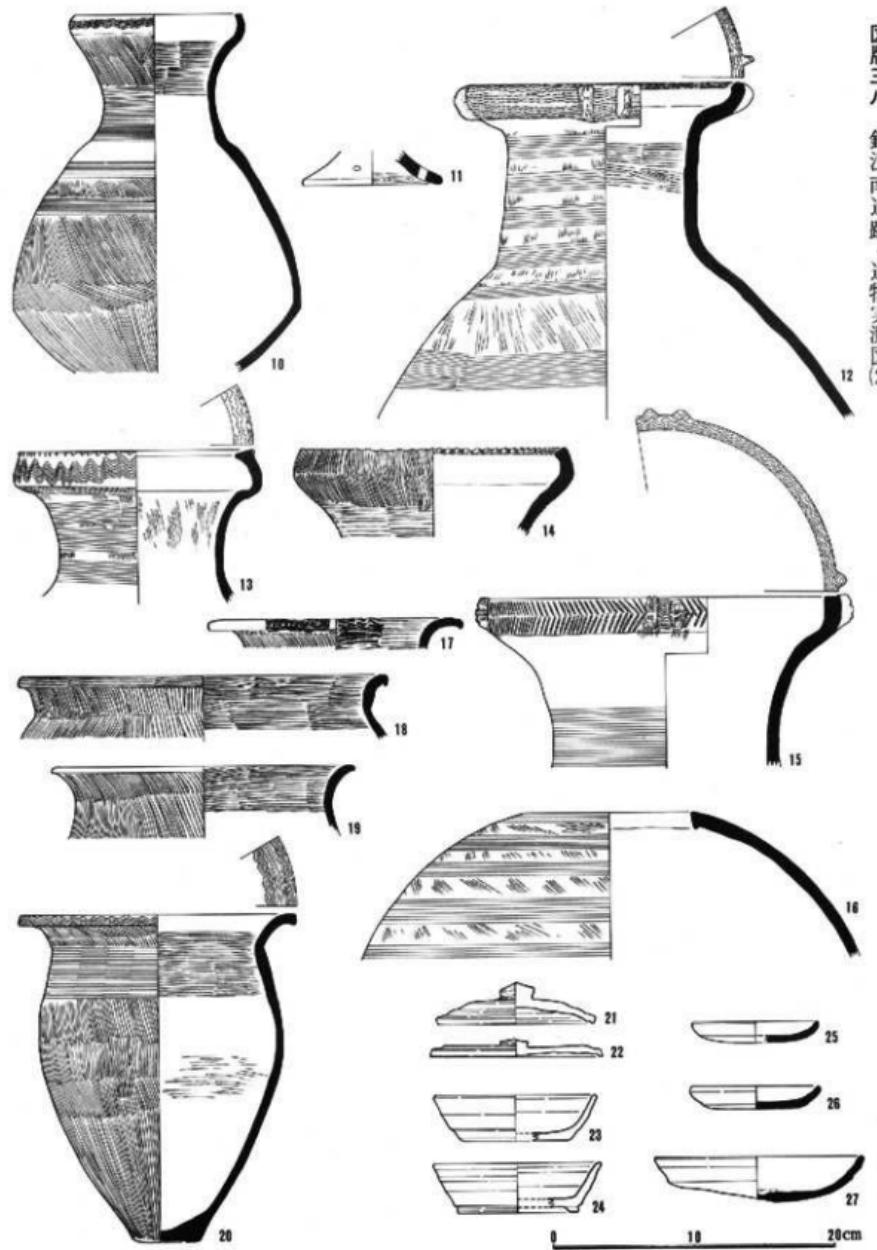
圖版三六 正伝寺南遺跡（北地区）・遺物実測図(5)



圖版三七 錐江南遺跡・遺物実測図(1)



圖版三八 錄江南遺跡・遺物測量圖(2)



国道161号線バイパス開通遺跡調査概要（昭和58年度）4

高島バイパス新旭町内遺跡発掘
調査概要

昭和59年3月

編集 滋賀県教育委員会
発行 滋賀県教育委員会
助成 滋賀県文化財保護協会
印刷 富士出版印刷株式会社
